

C隊長が黙つて新聞電報のある頁を開いて、私にさし出した。

私はラムネを一口ぐつとのんでから、その頁に目を落とした。そのとたんに、ラムネがぐつと胸につかへた。『大本營發表』といふ文字が、私の胸を手荒く締めつけたのであつた。

『大本營發表』

曩にニューギニア島北東方洋上において、我が決死の攻撃を受けたる敵航空母艦は沈没確實ならずと發表せるも、その後寫眞その他當時の狀況より察知し、沈没確實なること判明せり。なほ本航空母艦は中型新式航空母艦なり。

『お、これでよくなつたですね。あの海に散華した勇士たちも、これで満足でせう。』  
私は、長大息と共に、さういつたが、記事には、まだその續きがあつた。

(七)

○月○日(續)

大本營發表の次に記された新聞電報の記事は、次のやうなものであつた。

去る二月二十一日ニューギニア方面で、敵は中型新鋭航空母艦三隻を中央に、多數の輕巡

驅逐艦を配し、戦前アメリカ海軍が對日渡洋進攻作戦の方式として世界に豪語した所謂輪型陣を以て威風堂々侵入し來つたものであつたが、我が海鷲がこれを發見するや猛然先頭の一航空母艦目懸けて襲ひ掛かり、その艦尾に三發の命中彈を與へ、更に體當りでこれを撃沈せしめたものであつた。斯くて米航空母艦は四隻に減じた。(米の中型新式航空母艦には、エンタープライズ型とワズプ型の二型がある)

これを讀んで、私は日頃の溜飲が下りたやうに感じた。

私は、C隊長にいつた。

『しかしC隊長。これでも、私は大本營の發表は、まだ點が辛いと思ひますよ。』  
それを聽いてC隊長は、にやつと笑つて、

『はゝゝゝ。先生、かういふ發表は、慾ばるよりも、慾ばらん方がいゝですぞ。先生としちや、これでもまだ物足らんでせうが、アメリカ側では、この謙遜な發表を受取つて、相當氣持が悪いだらうと思ひますよ。』

『え、それはどういふ意味……』

『分りませんか、この意味が……。先生に分らんとは困つたなあ。はゝゝゝ。』



C隊長は笑ひに紛らしたあとで、  
『では宿題にして置ませう。』  
と、當座の結末をつけた。

だが實をいへば私にはC隊長のいふ意味が全然分らなかつたのではない。本當は、大體のところは分つてゐるのだと思つてゐる。しかしもつとはつきりC隊長の考へを聞きたいと思つたから聞き返したのだ。ところがC隊長は笑つて應へなかつた。まあいゝ、そのことは……。とにかく、今私は大本營發表の點の辛さに對し微笑んでゐればいゝのだ。これは禪問答みたいなものである。

さもあらばあれ、珊瑚海を覗くところまで南下し作戦行動の新記録を作つたわが艦隊勇士たちにとつて、〇〇〇〇沖海戦の戦果發表のあつたことは、一服の清涼劑の投ぜられた如き効果があつた。それによつて未知の戦闘を前にして士氣が更に昂つたことは、こゝに詳しく説明するまでもあるまい。

(來れ、敵の機動部隊よ！ 見れば、〇〇〇〇沖の弔合戦だ。ぎゆう／＼いふまで、やつつけてやるぞ！)

艦の總員は、口に出してそれとは云はないまでも、みんな心の中に深くそれを期してゐるの  
が、私にはよく分つてゐた。

どうか敵艦隊よ、現れて呉れ。そしてこれ以上勇士たちを神経衰弱にして呉れるな。私は、胸  
中ひそかにそんなことを祈つたのであつた。長期に亘り敵に見えざるために起る神経衰弱——と  
は、アメリカ側が知つたら、日本海軍にはすゝん贅澤な病氣があるものだと思ふであらう。し  
かし多分アメリカ側は、そのやうな高級な神経衰弱がこつちにあるとは、迎も氣がついてゐない  
であらう。

アメリカ側は、神経戦を狙つてデマ放送を盛にとばしては、どうだ／＼と效目の現れるのを  
待つてゐるが、そんなことでは、わが艦隊勇士を微動だにさせることが出來ない。それよりも  
つといふ事がある。——とアメリカ側に教へよう。それはアメリカ艦隊がわが艦隊の前面へちよ  
ろ／＼と顔を出しては、極めて敏捷にすゝつと早遁げをすることだ。それを何百遍も巧妙に繰返  
してゐれば、その方がよほど神経戦としての效目がある。但し、そちらの逃げ方がのろいと、お  
氣の毒にも、丸々こつちが御馳走さまになつてしまふから、そのことは豫め勘定に入れて置く  
がいゝであらう。



あゝ、今われらに戦闘のポテンシャルは手荒く騰つてきたが、カーレントは一向流れない。いくら待つても、更に流れさうでない。

『総員配置につけ！』の号令は頻發すれど、いつも中身は空に終る。どうやら報道班員までも、神経衰弱になりかゝつた模様である。

(八)

○月○日(續)

戦闘を前にして、腹が猛烈に減るのはせめてもの慰めである。

かうなると、普段は皿の端に押し出す冷凍鰯や冷凍秋刀魚の料理も一息にぺろりと平げ、もつと喰べたい顔になる。

『俺はこんど内地へ歸つたら、何としても冷凍を發明した人の顔を見て來にやおかん。』

と、士官の誰だつたかが、連日連夜執念ぶかく皿の上に現れる冷凍魚の面を見て遂に鬱憤を爆發させたことがあつたが、私もそのときは頗る同感であつた。だが、かうして戦闘になると、その冷凍の魚どもも急に味がうまくなつたやうに感じるのは不思議である。

私は、遂にその所感を食卓で述べた。

すると、私の言葉のまだ終らないうちに、髯の機關長が笑ひながら大きな聲を出して、

『まあ、海野さん。冷凍の秋刀魚などを、あまり褒めて感激して貰ふと、わしたちは迷惑しますぞ。見てゐてごらんなさい。冷凍秋刀魚がいゝ氣になつて、明日からこの食卓の上へ手荒くあの光つた面を並べるですぞ。』

『あゝなるほど、それは……』

『海野さん、感激するのはもうすこしお待ちなさい。この作戦が終れば、いづれ本艦は、どこかへ碇泊しますよ。そのときは、





わしがうまい魚を、あなたの皿の上にのせてあげますわい。」

『そいつは冷凍の魚かね、やつぱり……』

副長が向ひの卓子から野次る。

『冗談ぢやない、冷凍などを喰はせて、わしが威張れると思ふかね。もちろん、わしが暗夜に乗じて糸を垂れて釣上げるのだ。このあたりでは、大きな魚が釣れますよ。』

『阿呆魚かね。』

『あんなことをいふ。まあ阿呆魚かどうか、喰べてみて何か云つて貰はう。』

『何か云はうとしても喋れんのぢやないかね。』

『喋れんとは……』

『いつだか口がひきつって、その夜一夜中ものが喋れなかつたことがあつたね。あれは機關長の釣つた魚ぢやなかつたかなあ。刺身にして五切皿にいたが……』

熱帯の魚には、往々かうした毒魚があるのである。副長はそのことを云つてゐるのだつた。

『あれは、わしが釣つた魚ぢやない。あれは運用長の釣つた奴だ。』

機關長は、手をふつて、こゝを先途としきりに打消す。

『機關長、ひどいことを云はれますね。』

と、運用長が、卓子の端から笑ひながら早速抗議する。

『あれつ、運用長そこにゐたか。』

ゐたかもないものだ。今は夕食時間であるものを。

『とにかく運用長が釣つたか、わしが釣つたか、どつちかしらんが直接の責任者は、あとで「食用魚と毒魚の見分け方辞典」を引いた主計科の誰かだ。あそこで、こいつは毒魚らしいから、喰べるときは総員配置につけを號令すりやよかつたんだ。黙つて出してしまつたからいかん。あのとき、實はわしも釣り上げたとき、こいつはどうも魚相がよくないと思つたんだ。』

問はず語りに機關長は毒魚らしきものであつたことを自ら認めてしまつて、後で氣がついて照れる。卓子の上に、笑聲が溢れる。

『ひどい事があるもんぢやね。おれは爾今本艦において刺身は喰はんことにする。』

砲術長が太い胴中をゆすぶつて大恐慌を示す。

『すると、あのとき機關長だけはその刺身を喰べるのを遠慮されたのですか。』

と比較的新任の若いG隊長が航海長にたづねた。



「いやそれがね、いやしいもんだからうつかりして喰べてしまつたんですよ。」  
で、わつと士官室が爆笑に沸く。

「……やつぱり夜明まで口が曲つて……いやあのときはたいへんお世話になりました。軍醫長。」  
と機關長は隣の軍醫長の方へべこりとお辭儀をした。それでまたもや一同爆笑。死の戦闘を前に控へてのこの朗笑。既に敵を呑んでゐる！

## 制海完し

(1)

○月○日

ニューギニヤのラエ、サラモア攻略はいよく明日未明に迫る。敵機と敵水上部隊に對する警戒はますます嚴重を加へる。だから總員起しも、いつもより早い。が連日の緊張で、ねむくて仕方がない。あまりねむくて、生命もなにもいらぬやうな氣がする。

ドーン。

えらい音がした。大砲を撃つたぞ、なぜだらう——と、ぴしやりと目がさめる。下段のC隊長のベッドを覗くと、すでもぬけの殻だ。こいつは失敗つた、總員起しで起きるつもりを、私はまた寝込んでしまつたかと恥しくなりつゝベッドから飛び下りて、急いで服をつける。それから帽子をひつつかんで上甲板にとび出してみると夜はやうやく明け放れたばかり。海はまだその色も濃く、そしてその眞黒な潮は、海獸のやうに吠えながら舷の向ふを猛烈な勢ひで流れてゐる。

爆音が、耳をうつ。

士官たちも兵員も、一せいに中空を見上げてゐる。その方向に、私も視線を移すと、多數の艦載機が飛んでゐるのが見えた。これから曉の偵察が始るのであつた。

機影は、わづかのうちに、煙霧のうちに没した。

朝食が終つてしばらくすると、僚艦〇〇の艦載機からの無電が入つてきた。

「ワレ、本位置ニ於テ〇〇方面攻略部隊ヲ認メタリ、西方ノ視界ハ稍々不良ナリ。」

けふは、洋上某地點でわが輸送船團と邂逅することになつてゐた。僚艦〇〇の艦載機は、一足お先に、それに出會つたといふのだ。こつちは愕かないが、向ふでは飛行機の姿を見て、一時は



緊張したことであらう。

それから三時間ばかり経つて、通信長がにや／＼笑ひながら、甲板へ出て來たと思つたら、そこにゐた參謀に一枚の受信紙を手渡した。

『拾ひもの、拾ひもの……』

と、通信長がいふ。

『拾ひものとは……』

『敵の無電を傍受しました。』

『敵の無電？』

參謀がそれを受取つて讀んでみると、敵はわが輸送船六隻を發見した旨、ポートモレスビー宛無電で急信してゐるのだつた。參謀は通信長の顔を見て、

『やつぱり見附かつたか。〇〇で打電するのは、敵のお得意らしいね。』

笑ひながら、その參謀は、艦橋の方へ急ぎ足で行つてしまつた。その手には、受信紙がひらひらしてゐた。

それからまた時間が経つた。

『前方に味方輸送船團が見える！』

正午頃だつた。私は士官室にうだつてゐたが、見張員が届ける聲を聞いた。私は壁にかけてあつた帽子と双眼鏡をひつつかんで、又もや上甲板にとび出した。

皆、右舷寄りの舳の方を見てゐる。私も双眼鏡を目に當てて、水平線に焦點を合はせた。

果して、水平線上に、割箸をたくさん立てたやうな恰好に、輸送船の櫓が並んで動いてゐるのを發見した。

しばらくすると、船體が水平線の上に、はつきり浮び上つてきた。たくさんの輸送船だ。敵がさつき大周章で六隻の輸送船を見ると通報したが、それはほんの一部を見てゐることが判明した。敵は泡を喰つてやがるんだと、愉快になつた。

攻略部隊の艦影なども、はつきり水平線に浮び上つた。

向ふでは、こつちを見て、さぞ躍り上つて悦んでゐることだらう。わが第〇戦隊をはじめ、かくも多數の支援大艦隊が、海を壓して嚴然と附近海域の護りについてゐることを知つて、さぞ氣が強くなつたことであらう。



○月○日(續)

私は、遙かの水平線を征くわが輸送船團の姿に魅了され、舷の方へだん／＼身を乗出していつた。

あゝ勇ましい。だが、又いぢらしくてたまらぬ。私の胸の中には色合ひのちがつた二つの感激が交々湧いて、停るところを知らなかつた。

いぢらしいといふ感情は、普通の人にはちよつと分るまい。私はこれまでに、あのやうな輸送船團に乗組んで、敵國の海をひたむきに南へ突き進んでいつたことが二度もあつた。そこには、いづれも決死の覚悟の特別陸戦隊員とそして健氣なる日本船員が乗合はしてゐた。私たち報道班員も亦決死組の仲間であつた。敵前上陸は二度も成功し、そして私たちは不思議に生命を拾つた。向ふを征くあの輸送船團の中にも、さきの場合と同じやうに、特陸の決死部隊とそして健氣なる日本船員が乗組んでゐるのだ。報道班員も乗つてゐる。しかもその班員たちは、私がよく顔を知り合つてゐる人達ばかりなのである。東京を出發するときから一緒の人たちばかりである。或

るときは敵の潜水艦に脅かされて廣い大洋を幾日も／＼航海し、又或るときは異境の土を踏み、蒸し殺されさうな極暑熱の下に助け合つて仕事をやり、それから又或るときは、敵の彈雨の中を、互に身體を小さく縮めるやう戒め合つて突き進んでいつた。怪我をした者もあり、病氣に倒れた者もあつた。そして彼等は一様にいよ／＼顔が黒く焦げ、目が光りを帯び、脂がとれてひどく瘦せが見えて來た。しかしまず／＼元氣で、そして大膽不敵になつた彼等だつた。さういふ戦友の報道班員たちが、向ふに見えるあの輸送船團に乗り込んでをり、われはこれを護る支援部隊に乗り込んでゐるのだと思へば、餘計にいぢらしくなるのであつた。

さうでなくとも、輸送船團はいぢらしい。昔は地中海あたりをおど／＼と通つてゐた歐洲航路の客船もあり、また昔は凍る北洋から物資を搬んできた貨物船もあり、てんでに形のちがつた汽船が、今は同じ名の輸送船となつて相集り、集團をなして異境の海を舳艫相含んで敵の國土めがけて突き進んでいくのである。須川先生は『船は生きてゐる。』といはれたが、輸送船團の姿を見ると、その言葉が更に生きてくるのを覺える。今あの船たちも、さぞや感慨無量であらう。そしてその船たちは、いづれも謡曲『鉢の木』に於ける佐野源左衛門のやうに張切つてゐるのが、よく分る。



さういふ船は、みんな後檣こうじょうに軍艦旗を翻ひるがへしてゐる。それは『吾れ闘ふ』といふことを示してゐるのだ。武装まづしき汽船が、健氣けんきにも優勢なる敵に對して戦闘を挑んでゐるのだ。もし敵の航空母艦が眼前に現れ、戦艦が今攻め寄せ來るとも、この戦闘旗を翻へした日本船は直ちに勇躍死闘を開始して、一步も退かないであらう。

しかもさういふ船には、多數の非軍人たる日本船員が乗組んでゐるのである。かういふ人たちの強さ逞しさと來たら、すさまじいものである。それは荒鷲の體當りに似てゐる。身も忘れ、家も忘れ、全てのものを投げだしてひたすら敵國降伏のために猛進してゐるのである。かの防人の歌に『げふよりはかへりみなくて大君のしこの御楯みたてといでたつわれは』といふのがあるが、このかへりみなくてといふ言葉ほど、その船員たちにびつたり當て嵌る言葉はないと思ふ。無我無慾にして純眞直情じゆんしんちよくじやう、それはあの歌をもした遠き昔の防人の再來そのものだといつて過言くわごんではない。これがいぢらしくなくてなんとする。

私は、あまりにいぢらしいものを數へあげて、少しく感傷に走りすぎたやうにも思ふ。しかしこのいぢらしさこそは、今次の大東亞戰に皇軍が闘つて常に大勝利を獲得した根源の一つであるともいへるのである。挺身救國戰士ていしんきうこくせんしのこのいぢらしさを深く認識するとき、私たちは常に奮ひ起

つのである。

(三)

○月○日(續)

輸送船團の姿は、それから程なく、水平線下に没し去つた。

それは、わが艦隊が敵を求めて再び南へ變針へんしんしたがためであつた。

私は、その最後の船の櫓いすが、浪の向ふに隠れてしまふまで、双眼鏡をとつて、じつと眺めてゐた。(無事、敵前上陸に成功せられんことを祈る。)

私は心のうちで、いくたびかくりかへして祈念した。この攻略部隊の戦果は、後に三月十二日の大本營發表に明らかとなつたことであるが、それをこゝに書き入れて置かう。

●大本營發表(三月十二日)

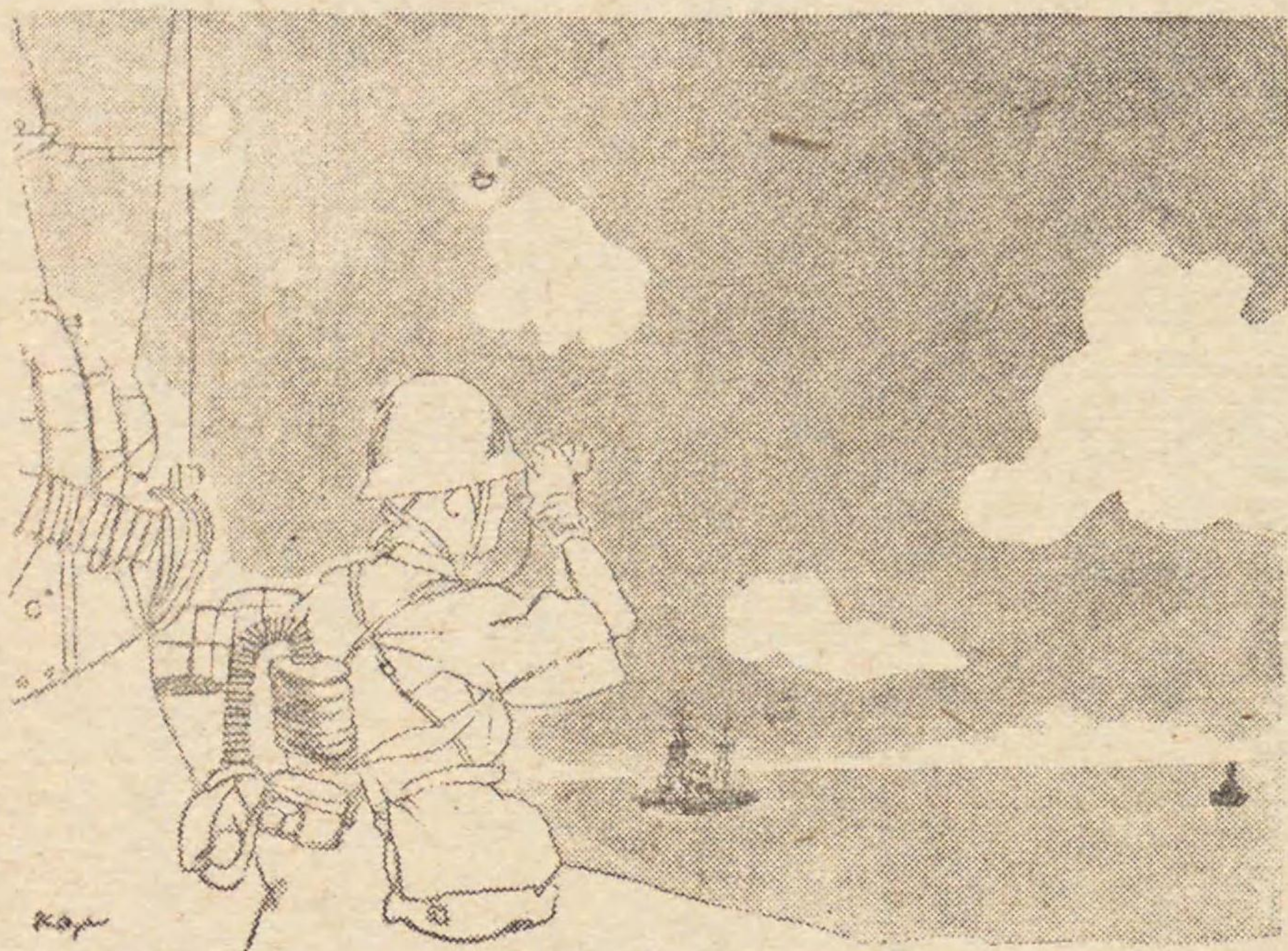
帝國陸海軍部隊は緊密なる協同の下に、三月八日未明『ニューギニヤ』島東岸の要衝サラムア並にラエの敵前上陸に成功せり、十日敵約六十機の反撃ありしも、四機を撃墜してこれを撃退、目下戦果を擴大中なり。本戦闘において我が方の損害左の如し。



- 一、沈没擱坐、徴用船二隻、輸送船一隻。  
 二、損傷、巡洋艦一隻小破、驅逐艦二隻中小破、徴用船三隻小破。

(註) 輸送船は上陸完了後にして、戦死一名の外、人員の損傷なし。"

後日私はこの大本營發表に接したとき、思はず畜生！ と叫んだことであつた。私の臉の裏には、この日ニューギニア附近の洋上に邂逅した輸送船團のあの雄々しい姿が、はつきりと思ひ出されたことだつた。そして輝かしいわが攻略作戦の成功の裏には、いつもかうした斷腸の想ひをあらしめるものが横たはつてゐること、だからまるで足をあげて砂上の泥人形を蹴とばすやうに樂に勝つてゐるのではないことを深く知らねばならないと思つた。いはゆる皮を斬らせて肉を斬り、肉を斬らせて骨を斬る底の死闘に勝つてゐるのだ。だから、われ／＼は勝利に酔ふにはまだ早いのだ。右の輸送船團の犠牲は斬り落された味方の肉であり、サラモア及びラエの占領と確保とは、われが叩き斬つたる敵の骨に當るのである。大洋に於ける進攻作戦は、いつの場合にもかうして攻めていく者が相當の犠牲を拂ふ覺悟の上でないと達成せられないのである。とにかく、それは後日のこと、私は再び〇月〇日の日記に戻らなければならない。『配置につけ!』



突然ラツパが艦内に響き互る。  
 すは敵襲か？

總員配置につけの號令にも、もう大分慣れてきた私だつた。手まはりよく戦闘用具を身につけて、どか／＼とラツタルを鳴らして艦橋に駆けあがる。

『敵は何處にゐますか。』

私は、そこにゐた水雷科の氣品の高い長身の某候補生にたづねた。

『敵の飛行艇が觸接してをります。左舷後方七千メートルのところですよ。』

『ふーん。敵の飛行艇といふと、偵察に來たわけですね。』

『爆弾を持つてゐるかもしれませんが、今



それはまだはつきり分りません。』

『とにかくその生意氣な奴の姿を見にや……』

と私が双眼鏡をとりなほすと、候補生は、

『先生、それぢや見え難いでせう。これに今ちやんと入つてをりますから、見られたがいゝでせう。』

といつて、でつかい双眼鏡を私に譲つてくれた。私はそれを覗き込んだ。なるほど敵機がある。はつきりとレンズの真中に入つてゐる。鼠色の雲間をゆら／＼泳いでゐる。

(来るか。来るなら来い!)と私は口の中で叫んだが、そのとき朝のうちに戦隊を出ていつたまままだ未還のわが艦載機隊のことを思ひだして、はつとした。

(四)

○月○日 (續)

双眼鏡の中に、うろ／＼して生意氣至極の大きな敵飛行艇!

或るときは南の方へ飛んでゐるかと思ふと、すつと翼を翻へして北の方に向きをかへる。それ

は敵機のスピードが、わが艦のそれに比して桁ちがひに速いため、さうしてゐないと觸接するところが出来ないためだつた。

既に左砲戦の號令がかゝつて、わが艦隊の砲は一齊に左に狙ひをつけてゐる。機銃もそつちを向いてゐる。

また飛行甲板の上では、艦載機が發動機を廻してぶる／＼ぶり／＼と手荒い音をたててゐる。命令一下、いつでも飛び出す態勢にある。

だが變らないのは、わが艦隊の針路であつた。豫定のとほりどん／＼南へ進撃を續けてゐる。(敵機よ、来るなら来い!)

と、艦もさういつてゐるやうである。彼に對して備へてはゐるが一向むきになつて相手にしてはゐない。林のやうにこつちはしづまりかへつてゐるといつていゝ。

敵機は遠くにゐて、十五分ばかりうろ／＼とわが艦隊をつけてゐたが、遂に戦闘に入ることを諦めたらしく、急に機首を東に立直すと、どん／＼逃げてしまつた。遠吠えをしてゐた小犬が、遂に尻尾をまいて退散してしまつたやうなものであつた。

(なんて弱い奴だらう。)



私は、文字どほり雲の中にまぎれ込んで遁走する敵機に對し、眼鏡越しながら、ふんと鼻で嘖つてやつた。

尤もわが艦隊のこの威容を見ては、いかに生命しらすの敵機といへども、ちよつと二の足を踏まずにはゐられないであらう。

敵機退散はいゝが、心配なのは早曉艦發して哨戒戰鬪に出掛けたわが艦載機隊のことだ。私は、分れの號令を聞いて艦橋から下りかゝつた飛行長をとらへて、そのことを尋ねた。すると飛行長は、例の丸い顔に、少年のやうな眼をくるく／＼させ、

『あゝ、あれは心配ありません。さつき連絡がついて、全機無事こつちへ戻つて來ます。夕刻までには歸りつくでせう。』

と云つて呉れたので、私は大安心をした。彼等は、途中敵機にも會はず、長時間の哨戒に成功し、

「敵艦隊の影を見ず。」といふ結果になつたさうである。

『それでは、ニューギニア攻略部隊も、豫定どほり目的地へ突入出来るわけですね。』

『さうですね。こゝしばらくは海上部隊に攻撃される心配は、まづありません。只、敵の飛行機

が來るか來ないか、それがちよつと分りかねます。さつき敵機がこつちに觸接してゐましたし、またわが輸送船團も敵に見つかつてしまつたので、その點はまだ安心なりかねます。』  
飛行長だけに、敵の空襲に對しては深く警戒してゐる。かういふ飛行長がゐるかぎり、大安心であると思つた。

この日の夕食はお萩だつた。これには愕いた。私は目を細くして皿の上に並んだお萩の數をかぞへた。みんなで五つある。數に不足はない。安心して箸に挟みあげる。うまい。たしかに小豆の餡だし、そして甘い。ねつとりとしたもち米の齒ごたへに、夢を見てゐるやうな感がある。

隣の席のC隊長も大よろこびである。戰鬪の前には、よくお萩が出るさうだ。向ふの方の席からもうまいぞと歡聲があがる。

『おい従兵、ナイフを持つてこい。』

妙なことをいつてどなつた者がある。見るとそれは水雷長だつた。

『水雷長、ナイフをどうするのかね。』

砲術長が目を見はつた。

『こんな甘いものを、わしに喰はせるのは残酷だよ。ナイフで餡こをけづるんだ。いや、そんな



ことをしてゐると「配置につけ」に間に合はん。おい従兵、三本つける。」  
左黨の水雷長はうまいことをいつて、遂に大びらに液体米三本を注文してにやつとする。水雷  
長の皿にはお萩が四つ残つてゐた。

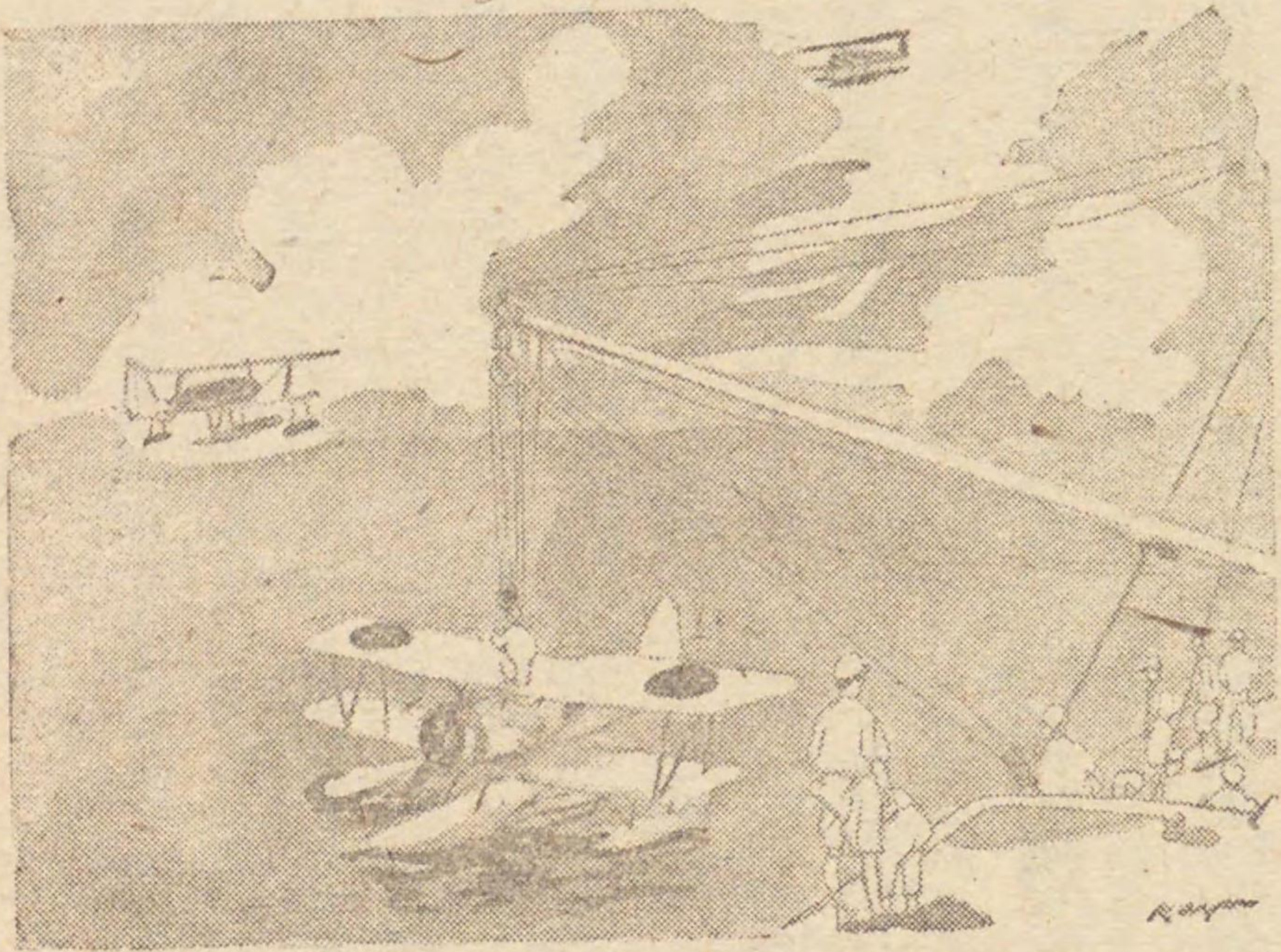
## (五)

○月○日(續)

夕方になつて、わが艦載機隊は歸つて來た。空中に、ぶーんと爆音が聞える。一機また一機、  
糸を引くやうに、つぎつぎに歸つて來る。待ちわびてゐた戦友たちは、上甲板や艦橋の窓から空  
を見上げて、至極満足さうに笑む。

艦載機は、日の丸のついた翼を張つて、それ／＼の母艦の上を、元氣にそして悠々と旋回す  
る。やがて母艦は、ぐつと針路を曲げて停止する。それを見ると艦載機はさつと海上に舞ひ下  
り、あとは滑走する／＼と母艦の傍へ近づいてくる。

ウインチの腕が、ぐつと舷を越えて外にのびる。すると艦載機はあざやかにロープに吊り上げ  
られる。そして飛行甲板へ收容される。熊の子のやうに厚い飛行服を着込んだ乗組員が、にこに



こしながら、機の胴體から現れる。そして  
飛行長の前に整列して、形を改めると、す  
ぐ報告にかゝる。見てゐて、至極手輕で、  
きび／＼してゐるのが頼母しい。

どの艦載機も、しばらくのうちに、全部  
無事戻つて來た。永い間の哨戒の任務を果  
たした勇士たちは、非常に元氣である。そ  
していつの間にか軽い防暑服に着かへて、  
甲板に立つて煙草を吸つてゐる。横から見  
てゐて、それが非常にうまさうに見えて羨  
ましい。

飛行甲板では次々に歸つて來た飛行機の  
まはりには、機體手入れのため、整備員が  
とりついて、せつせと働いてゐる。一分間



の無駄もなし。

甲板に、艦載機の歸還を案じてゐた士官たちも、すつかり肩の荷を下ろして、涼しい舷に近い折疊椅子のうへに深く腰をかけ、しづかに暮れていく敵國の海を眺めながら煙草を吸つてゐる。私もほつとして、そのお仲間に入る。そして火繩の火を煙草にうつす。

敵國の夕空は、今日もまたうつくしい五彩に映えてゐる。仰げば、それはまるでお伽噺の本の扉繪にある天國そのもののやうな絢爛たる夕焼の空だ。

その下には、涯しなき青い海原が、ゆつくりとうねりを立てて後へ動いてゐる。

右舷から見る海は、夕雲に映えて、たいへん陽氣に見える。左舷から見る海面は、もう暮れかかつて、何だか腹を立ててゐる人のやうに不機嫌に見える。

潮の香が流れて來た。風が少し出て來たやうである。大きいうねりが一つ、向ふから押し寄せてくる。

遠くの空が、ぴかつと光つた。雲の中で稲光がしたのだ。日が落ちてから、スコールが來るのかもしれない。

海が暮れていくと、潮がだん／＼早くなるやうな氣がする。

だが空はまだ夕焼してゐる。入道雲の群像が頬を染めて、或ひは笑ひ、或ひは怒つてゐる。

南よりに、卷毛のお嬢さんが四五人、合唱してゐるやうな雲の群像がある。その一等中央の雲のお嬢さんは横顔がどこやらうちの長女に似てゐる。

おい／＼、こんなところで何をしてゐるのかと、聲をかけた氣がする。

その向ふには、赤鬼みたいな雲が、こつちを向いてわめいてゐる。

稲光のしたところに、やつぱりスコールの雲がある。雲の下には櫛の齒を透してみるやうに、黒い並行した斜線が海面をつきさしてゐる。重い雨が落ちてゐるのだ。

その傍に雲の棚がある。その棚の下から、臍の緒のやうなものが、だらりと下つてきた。龍巻が起つてゐるらしい。

舷から身を乗りだして、空と海だけをじつと見詰めてゐると、自分は大宇宙の帝王になつたのぢやないかといふ氣がしてくる。一瞬戰場にある想ひを忘れる。

(六)

○月○日(續)



海は暮れてしまった。

夜食には『冷しうどん』が出て腹が出来ると、總員徹宵海上の護りにつく。もちろん私も緊張して明日未明のわが攻撃部隊の敵前上陸が、果して豫定のだんどりで成功をみるかどうかと案じる。

といつて、私にはどうするといふ改まつた仕事もないので只めづらしく、士官室の中をあつちの隅へいつて煙草をふかしたり、こつちの隅へいつてラムネを飲んだりして時間をつぶした。

集る士官たちの數も今夜はすくない。そしていつもとはちがひ、口數もすくない。只圍碁と將棋が始つてゐる。本を開いて、黙つて讀んでゐる人もある。それから假設ベツドは、どれも皆満員である。

電燈も、いくつか消されてゐて部屋のあつちこつちに常には見なれない陰影が出来てゐるのも、何となくすさまじい氣分を添へる。

今ごろ攻略部隊では、武装いかめしき隊員が揃つて出陣の盃をあげてゐるであらう。暗い灯影で書き遅れた遺書を書いてゐる勇士もあらう。私たちの仲間の報道班員は何をしてゐるだらうか。取つておきのパイナップルの罐などを開けて、これまで轉戦又轉戦したことと思ひ出などを

語り合つてゐることであらう。

だん／＼に、私は異様な氣持に追ひ込まれてくるのに氣がついた。恐らく今度は南緯〇〇度のあたりまで下つた筈だが、身體の中では私の内臓が戸惑ひして、胃や腸は上にぐつと押し上がりとし、反對に肺臓や心臓が重く下に沈んで行かうとして、それ／＼蠢いてゐるやうな氣がする。これは、球形の地球を考へて、内地にゐるときの姿勢に較べ、今の位置では確に逆さになつてゐるので、ふとそれが氣になつてきたのである。

なぜこんなに氣が變になつてくるのであらう。一つは私の健康がすこし下向きになつてきたせゐであるにちがひない。それから、妙に陰影の多い今夜の士官室の異様な感じも、それを手傳つてゐるやうに思ふ。このとき背中にひやりと冷い汗が流れてゐるのを感じた。どうも變だ、今夜は……

その異様な氣分から私を救つてくれたのは私の從兵だつた。

『先生、入浴よろしい。』

私の前に立つて、きちんと姿勢を正し、そしていつものやうに齒切れはいゝが、ちよつと大阪訛のある辯で私に知らせてくれた。その聲を聞くと、私は夢から覺めたやうな氣がした。



『すぐはいります。』

今夜は入浴をよさうと思つてゐたが、私は急に氣が變つた。そしてそれをいゝ轉機として、士官室を出た。

自室の扉を押して入つたとき、私はもういつもの私に戻つてゐた。私は急に前途に希望を持つた——といつても、大したことはないのだ。それはこれから入浴して、汗によれた肌衣や禪やハンカチなどを洗濯するといふ仕事の希望である。しかし今の私にとつては、これが相當派手な仕事にさへ思はれる。

服を着かへて、浴衣に着かへた。そして懷中を、洗濯すべき衣料でふくらませて、私は士官浴室へいつた。

中には浴室が二つあつた。垂幕一枚で區分されてゐる。右が士官用で、左が第一士官次室、通稱ガムルーム用である。

扉を入つたまゝの狭いところに申譯ばかりの脱衣場がある。浴衣は釘へ引懸けるやうになつてゐる。その下に板が並べてあつてタオルに包んだ石鹼がずらりと並んでゐる。それには各々白墨で名前が書いてある。副長とか航海長とかT參謀とか……。私のタオルの包のところには『先生』

と書いてあつた。

私は裸になると、その包みと洗濯ものを両手で抱へて入つた。浴室は空いてゐた。

(七)

○月○日(續)

入浴するといつても、内地の旅館で風呂にはいるのところが、軍艦で入浴するには仲々技術が要る。

まづ正面に、丈夫な眞鍮で出来た浴槽が二つ並んでゐる。慣れない者がこれを見た瞬間、これは素敵なバスだと思ひ、いきなりこれに飛びこまうものならそれはとんだことになる。

といふのは浴槽は外見まことにりつばであつて、一流のホテルでもちよつとこんな豪華なバスはないのであるが、さてその浴槽のふちを跨いで中に入つてみると、湯は底の方にちよつぱりしかない。しかもこの湯は、湯の部類に入るか、それとも水の部類に入るか、どつちだか分からないものである。その中に肌をつけると、ひやりとする。體温が湯の方に奪ひとられる。いくらおぼせてゐても、この風呂に入ると、ぶる／＼とする——と書いても大した間違ひではない。



しかしこの僅の湛へられた水湯こそ、艦内の汽罐で蒸溜した實に貴重な眞水であるのだ。文句をいへた義理ではない。また事實熱帯戦線にあつて、眞水の風呂に入るといふことほど贅澤に思はれることはないのだ。

この風呂に、いきなりざぶんと入る者はない。汗や垢でもつて、この風呂を少しでも汚すことは忍びないのである。だから浴室に入ると、まづこの浴槽につかりたい誘惑にかゝるが、それを一生懸命に怯へなければならぬ。そしてまづ身體を先に清めるのである。清めるためには、壁のところに蛇口がある。内地の風呂と同じく水と湯の蛇口があるのだ。

といつて、この蛇口も、じゃあく／＼出すことは許されない。小さな洗面器に、まづ三杯ぐらゐのところまで我慢しなければならぬ。そして身體にじゃあく／＼かけて、流し床に流してしまふわけにはいかない。

私たちは、まづ一杯の湯を洗面器にとる。それからその湯でしめして石鹼を身體中につける。それから手拭でこするのである。こすつた手拭に石鹼の泡が相當ついたところで、流し床の上に重ねてある洗濯物の上で絞る。すると石鹼の泡が、その洗濯物の上に落ちる。落ちてこれをうるはす。

洗濯物の一番上はハンカチである。その下は褌だ。その下はシャツだ。上から下へと、だんだん石鹼の泡は液状に變つて滲透していく。

かうして身體を石鹼でこすつた後で、身體から石鹼を洗ひ落すのである。それには手拭を使はないで掌に湯をとり身體へひっかけ、そして石鹼を洗ひおとす。そのときなるべくなら洗濯物の上に足を置いて直立してゐるのがいい。すると身體の上の方から石鹼を洗ひ落していくと、石鹼の泡は自然身體を傳はつて下に流れ落ち、足に集るから、その下にある洗濯物は更に石鹼水にうるほふわけである。このとき洗面器の湯は三分の一位に減つてゐるのであるが、その中へ手拭をつけ、揉んでよく石鹼を洗ひおとす。するとこれが大泡立つた石鹼水とかはるから、あとでこれを洗濯物にひつかけることにするのである。

次は洗濯物を洗ふことだ。洗ふといふよりどし／＼と流し床の格子にこすりつけて揉むのである。石鹼水が足りなくなると、かねて用意して置いた洗面器の石鹼水をちよつと垂らして又揉む。かうしてハンカチが綺麗になり、次に褌が綺麗になり、最後に一番扱ひ憎いシャツまでが綺麗になつてしまふ。

次に改めて一杯の湯を洗面器に取る。そして洗濯物と手拭とを一緒につけて、さぶ／＼と洗



ふ。水は相當濁つてゐるが、これでまづ石鹼は大半洗ひ落ちる。残り湯はそのまゝ捨てないで、慎重に肩のあたりから身體にふりかけて、身體に残つた石鹼分を洗ひおとすのである。

(八)

○月○日(續)

もう一度、洗面器に湯をとる。これが三杯目だが、こんどは一杯とらないで、三分の二位入れる。

この中で、洗濯物をすすぎ、それで洗濯物は綺麗になつたこととする。やり方が下手だと、ここで水は石鹼に相當濁つて、こんなので干していゝかなあと首をひねらされる。あとに残つた水は、捨てると勿體ない。もう一度身體にかける。何のことはない、身體はいつも洗濯物のお餘りの湯でもつて清めてゐることになる。

その上で一應全身を手拭で拭ひ、それから始めて待望の浴槽につかるのである。

浴槽の底にちよつぱり湛へられた水湯ではいくら私のやうな小さな身體の者でも、全身を浸すことは仲々むづかしい。身體の大きな士官たちは一體どうして漬つてゐるかふしぎである。私も

始めのうちは困つた。困つた結果考へた。考へ抜いて一つの解決を得た。それは水をスタティックス的に考へてゐると、とても全身を浸すことは不可能であるから、そこでやむなく、ダイナミック的に水を扱ふことによつて目的を達し得られる。つまり早い話が浴槽の中であられるのである。浴槽の中で身體を左右へひねり、手足をばた／＼させるのである。するとしびきが手荒くとぶ。その結果、なんとか全身が濡れるのである。かうでもしないと、全身を漬けることは全く不可能である。多分士官たちも、私が考へ出したやうに、この中で暴れてゐるのだらうと思ふと、をかしくなつた。そのせゐか浴槽はしつかりと床にボルトとナットでとりつけてある。それから浴槽を出て、洗面器に三分の一の湯をとり、これで手拭を絞り、全身から水分を拭ひ去るのである。これで入浴をはりとなる。やれ／＼気が疲れる。

あとは洗濯物をもう一度絞つて、手拭と石鹼函を一緒にする。それから浴衣を着、草履をつつけて、小暗い通路を自室へ戻つていくのである。

途中、水兵から幾度となく敬禮をされる。艦内で浴衣を着て歩いてゐるのは士官に限る。だから原則として浴衣着が向ふを歩いてくれば敬禮して間違ひないのである。しかしこれは原則である。中には私といふ餘計な者が混つてゐる。私には敬禮しないでもいゝのであるが、何しろ夜



更となると通路の電燈は足許を僅かに照らしてゐるだけで暗い。だから浴衣が向ふから歩いてくるのは分るが、誰が歩いてゐるのか、顔が見えないから判別しようがない。従つて水兵諸君は、私にも敬禮を奢つてくれてしまふのであつた。奏任官待遇の報道班員の制服よりも、浴衣の方が餘程權威があつたわけである。

私は、浴室からかへりに、しば／＼へまをやつた。一日の熱汗を流して、ゆつたりとしたい、気分になり、錢湯からかへるやうな調子で手拭と石鹼函とを右手に持つてぶら／＼通路を戻つてくると、さつと水兵の敬禮の不意打にあふ。すぐ答禮をかへさなければならぬ。うっかり右手をあげようものなら手拭と石鹼が一緒にあがる。こいつは恰好がよくない。それに耳の傍で、石鹼函で石鹼がごと／＼鳴る。まづい！ と私は、暗やみの中で顔を赭くする。ついうっかりと石鹼函と手拭をあげてしまふので困る。

事前に気がつくこともある。その場合いそぎ石鹼函と手拭を左手に持ちかへる餘裕はない。そんなことをしてゐると、相手の水兵の傍を通り過ぎてしまふからだ。さういふときは仕方がないので、さつと左手をあげて誤魔化してしまふ。これが艦内生活で私が誤魔化す只一つのものであつた。入浴の歸り途までかうして氣骨が折れる。

自室へ戻ると、扉をばたんと締めてすぐ素裸となる。そして洗濯物をベッドの天井に釣る。豫めちやんと紐が張つてある。誰でもこゝに干すのだ。なにもかも忘れ、くたく／＼になつて禪一枚でベッドの上に伸びる。

## (九)

○月○日

總員起しの號令を、夢現に聞いた。

『食事よろし。』

と、従兵長が入口で聲をはりあげたので、やつと本當に目がさめた、意外の朝寢坊不覺の至りである。

むつくりベッドに半身を起す。顔に當つたものがある。見ると、それは禪の紐だ。天井裏に、禪はから／＼に乾いてゐた。シャツも乾いてゐる。ハンカチは乾きすぎて、ベッドの隅つこに落ちてゐる。

下に降りて顔を洗つてゐると、C隊長がぬつと入つて來た。



『お早うございます。當直でしたか。』

『さうです。今終わりました。相當油をたいたので、こつちも暑かつたでせう。』

『さうですなあ。』

と私は考へてみて、

『實は不覺の朝寢坊をしたといふやうなわけで、昨夜はぐつすり寢込んでしまいました。暑かつたのも、夢現ゆめげんに覺えてゐるだけです。』

隊長は帽子をぬぎ手袋をぬぎ上衣をぬぐ。

『さあどうぞ。かはりませう。』

と、私は洗面器を交替した。

『……で、上陸作戦はどうなりました。』

C隊長は、前屈まへかむみになつて、水の栓せんをひねりながら、

『成功しました。午前〇〇時から〇〇時ごろの間に、陸戦隊も陸軍部隊も全部上陸を完了したさうです。強雨があつて、ちよつと手間がかゝつたらしい。』

『敵の抵抗ていかうは……』

『大した抵抗も受けなかつたらしいですね。但し未明から敵機がすこし出て來たさうです。』

『まあ、うまくいつてよかつたですね。すばらしい戦果だ。』

『しかし、わが第〇〇戦隊は又もや失業ですわい。みんながつかりしてゐます。』

『全くお氣の毒です。』

戦に勝つて、おくやみを云ふのも、日本軍なればこそだ。

朝食のため士官室に行く。

士官たちは、もうあきらめたといふ顔になつて、平常の調子てうしに戻つてゐる。

わが第〇〇戦隊の今後の行動について命令が下りた。明日はソロモン群島ソロモンに至り、附近を掃海さうかいし、その翌日は附近島嶼たうしよを掃蕩せよといふことであつた。

午前十一時、配置につけの號令下る。

私も、もうすつかりこの號令に慣なれて、廊下らうかを走るやうな調子で艦橋にかけあがる。

敵機觸接中なり。

大型の飛行艇だ。例によつて、わが主砲射程しやていけんごう圏外くわいにくつついて、しばらくうろくしてゐたが、そのうちにさつと逃げてしまつた。



占領したラエとサラモアとはぼつ／＼敵機が現れてゐるとの報告が入る。敵もやうやく吾れにかへつて、反撃をやり始めたらしい。

この日海上には雲が低く、秋の如く涼しい。緯度の関係であらうが、かうも、涼しくなるものか。連日猛暑にいためつけられた身は俄に蘇つたやうな気がする。

夕刻になつて、敵の陸上攻撃機がこつちに近づきつゝありとの警報が入り、また緊張した。だが、敵機は遂に姿をあらはさず、日は暮れてしまった。

『戦闘配置ニツケ、夜戦ニ備へ。』

油断はならない。嚴然たる號令の下に、一同緊張をつゞける。

針路は既に東方へ改められてゐる。このまゝで行けば、明朝はかなりソロモン群島の方へ引返してゐるだらう。

とにかくわれら支援部隊の任務は一先づ終了したのであつた。

(十)

○月○日



又暑くなつた。

海上は穩かである。また入道雲の國に戻つてきた。

支援艦隊はすでに解体せられ、わが第○戦隊は、支隊たる第○戦隊と第○戦隊だけを引連れて北上してゐる。

夕刻すこし前、前方に島が見えはじめ。うつくしい夢のやうな島々が點々として並んでゐる。

双眼鏡でみると、大きな島のかげには、原住民の小屋らしいものや、赤いペンキを塗つたトタン張りの屋根をもつた白人の家らしきもの見える。

小さな島は、例外なく全島椰子の木でも



つて蔽はれてゐる。もちろんこれは植林である。

だん／＼近づくと従つて島の白い砂濱が見える。この砂濱にまつくろなものが点在してゐる。じつとしてゐて、動かない。岩か鳥かと思つたが、もつと近づいた上でみると、それは身體のまつくろな原住民だと分つた。

その原住民たちは、砂濱にじつと立ちつくしてゐるのであつた。まるで岩の如く動かない。初めは、一體何をしてゐるのであらうかと不思議に思つたが、しばらくするとそのわけが分つた。その原住民たちは、とつぜん沖合に現れたわが艦隊の威容にびつくりして、呆然とそこに立ち竦んでゐるのであつた。

カメラが海上を走つてゐるのが見えた。

艦長が双眼鏡をとつて見てをられたが、

『ほう、こゝの原住民はまつくろだな。まるで黒炭の塊みたいだ。』

と感嘆せられた。

私は双眼鏡をとり直して、ピントを更めて合はせたが、私の双眼鏡では、大したことは分らなかつた。それに視力の點でも、艦長にはかなふべくもない。

遠空に、ぴかりと稲妻が一閃した。

またスコールが来るか。

『向ふの島から煙が上つてゐるね。』

と、艦長が當直將校にいはれる。

當直將校は艦長と並んで、双眼鏡を眼にあてて、煙の方に見入る。

私は、ぎくんとした。わが艦隊が近づいたので、敵または敵性人が、そのことを狼火をもつて敵の飛行機に知らせてゐるのではないか。

『あれは製材工場の煙です。』

と、當直將校はこたへた。私は感心した。當直將校の眼は何といふすごい視力をもつてゐるのだらうと。すると艦長が、

『あゝさうか。さつき艦載機が報告してきたのは、あれだつたか。』  
とうなづかれた。

私はそれを聞いて安堵した。艦隊に寸毫も油断はないのである。かうして陸岸に近づくときは、前もつてちゃんと艦載機が偵察を完うしてゐるのだ。



『すると、あそこには白人があるわけですね。』  
と私はふと気がついたので、さう云つた。

『ゐるかもしれませんね。』

當直將校がこたへた。

『ぢやあ、油断はなりませんね。』

『明後日、島を掃蕩してみれば分るですよ。濠洲人は逃げてしまつて、原住民が火を焚いてゐるのだと察するが……』

艦長が當直將校に替つて、さう説明をされた。さうかもしれない。

『すると、本艦から陸戦隊が上ることになりますか。』

『各艦の陸戦隊が上ります。獲物があるかどうかは分らないが、上げてみます。』

『さうですか。私もついて行きたいなあ。』

『どうぞ、いつて下さい。皆も海野さんに掃蕩戦を見られてあとで書かれると思ふと、さぞ張切ることだらうから。』

艦長はさういつて、眼を細くして微笑された。

(十一)

○月○日(續)

艦隊は群島の真中にどつしりと腰を据ゑて投錨した。

四圍はこれ悉く敵の領土である。向つて来るなら来いと、敵を睨みつけての肚藝である。小氣味のいゝことといつたらない。

艦載の艇やカッターが、どん／＼下ろされる。舷梯も、がたん／＼と音を立てて下りる。甲板員は一とき目のまはるやうな忙しさを。

掃海部隊が甲板に整列した。號令一下、舷梯を下りて、艇にのりこむ。艇はすつかり武装されてゐる。そして大きな軍艦旗が艦にひるがへつてゐる。

僚艦〇〇の水雷長が總指揮官で、直ちに附近の掃海作業が始められる。きび／＼と作業はすすむ。

副長がにこ／＼しながら、こつちに近づいた。私は敬禮をして、明日の掃蕩戦に、陸戦隊について行くことをおねがひする。すぐ許可が下りる。



後甲板の方から、にぎやかな聲が近づいてきた。何だらうと思つてみると、機関長が大きな魚をぶら下げて、えびすさまのやうに機嫌がいい。

『さあ、海野さんも見て下さい。ほら、この前約束したでせう。あれですよ。今夜は、頬つべたの落ちるやうなうまい刺身を喰べさせてあげますよ。』

『へえーつ。これはどこから持つて來られたのですか。』

『冗談ぢやありませんよ。どこから持つてくるものですか。今、私が釣り上げたのです。目の下一尺五寸はあるね。』

『本當ですか。お釣りになつたにしては、どうも早いのでおどろきました。』

『いや、機関長の早いのは、釣りにかぎつたことぢやない。』

と、副長が笑ふ。

『いやあ副長。人聞きのわるいことは云はんで下さい。變な方向に誤解せられると困るからなあ。』

『頬つべたの落ちるのはいいが、顔が曲るのは大丈夫かね。』

『あんなことをいつてゐる。これはいいですよ。絶対安心の出来る魚だ。』

『いいらとも、ちよつと違ふね。いいらは、もつと膚が黄いろい。』

『かういふいいらもあるんですよ。南洋あたりではもつと黄いろいが、こつちへ來ると黄味がうすくなる。副長はもうすこし魚相學を勉強して貰ひませう。』

『この前、機関長保證つきの安全魚だといふので御馳走になつたが、あのとほりとんでもないことになつたからね。』

『あゝあれは不幸なる例外ですよ。毒魚鑑定辭典を繰る先生が、すこしアルコールが廻つてゐるね、實はアルコール性急性性色盲に陥つてゐたから、あんなことになつた。』

『アルコール性急性性色盲？ それは初耳だな。しかし、その色盲先生といふのは機関長自身のことぢやなかつたのかなあ。』

『それはどうでもよろしい。過去のことぢやから。おい／＼従兵。副長も海野さんにもめでたく對面がすんだからこの暑さに腐らぬうちに、板前長へもつていけ。』

と、機関長は要領よくそのいいらしき魚を従兵に渡した。

『さあ、もう二三尾かせいで來よう。皆喰ひ意地が張つてゐるだらうから、今の一尾ぢやとても足るまゝ。』



機關長は再びにこ／＼顔で、下甲板の方へ戻つていつた。その後姿を見送つてから副長は、

『おい、厨夫の方へよくいつて、もう一度念入りに辭典を引くやうとな。』  
と従兵にいへば、従兵は魚を捧げて不動の姿勢をとり、

『はい。厨夫のところへいつて、もう一度念入りに辭典を引かすであります。』  
と復唱した。

## (十二)

○月○日(續)

夕陽は入道雲の向ふへ入つた。

海上に、しづかに夕燒雲がうつる。

掃海隊は、それ／＼歸艦した。

本艦の隊員も、戻つてきた。みんな急に眞赤に陽灼けして、酒をしこたま呑んだやうな顔である。機械や器具をかついで、舷梯をあがると、甲板に整列する。點呼と講評とがあつて、分れの

號令がかかる。

候補生が士官のところへ来て、話をしてゐる。ガブルームのキャプテンである通信長が口から泡をとばして、

『候補生、そりや本當かね。』  
と聞いた。

『本當であります。一同で確認しました。動物園で見たから、間違へることはありません。』  
何の話かと、私は耳を聳てる。どうやら動物學の話らしい。

士官は、感心したやうに首を振つて、

『さうかね、鰐なんちふものが海にゐるかね。おれは又、鰐は河の中だけにゐるものと思つてゐた。』

鰐の話であつた。

『たしかに海にをりました。鰐の顔を見まちがへるやうな者はをりません。始め兩眼と鼻さきを出してをりました。鰐だと思つたので早速艇をその方に向けて全速前進しました。鰐は愕いたものとみえ、手荒く水を跳とばして逃げ出しましたが、全長約十メートル……』



「十メートル？ それは又、手荒くでかい奴だなあ。それで、やつたか。」

「はい。直ちに機銃で射撃しました。たしかに手應へがあり、のたうちまはつて水中に没しました。そのうちに浮いて来るだらうと思つて、今まで附近を警戒してゐましたが、たうとう浮いてきません。惜しいことをしました。」

「それは惜しいことをした。ぜひおれに貰ひたかつたなあ。」

「はあ。……鰐の肉はうまいさうでありますなあ。」

「おい／＼、おれが鰐の肉なんか喰ふかい。お前みたいなお子供にはわからん。おれはハンドバッグを拵へるつもりぢやつた。」

「はーん。」

候補生は、目をぱちくり。

「通信長、いつ華燭の盛典をおあげになりますか。」

いつの間にか、早耳の機關長が傍へ來てゐた。

「やつ。機關長、をられたですか。」

「をられたですかもないよ。さういふ暑い話を赤道直下でやられては、猛烈にこたへますよ。」

で、いつあげるのかね。」

「冗談ですよ。私は當分ちよんが、あです。」

「ちよんが、あには、鰐のハンドバッグは不要だよ。わしの娘に譲つてくれ。嫁入道具にするからね。」

「ほつ、機關長のところのお嬢さまは、もうそんなお年齢でしたか。」

「君のところへ嫁入させたいんだが、あと十六年しないと駄目なんだ。今年四つぢやからう。」  
皆が笑ふ。通信長は髯面を眞赤にして、照れてしまつた。

「機關長。刺身當直はどうされました。」

一生懸命、釣りに専念の筈の機關長に、私はかうたづねた。

「刺身當直の方は運用長と交替しましたよ。妙に運用長の釣ばかりに引懸るのでね、この灣の魚どもは臍まがり揃ひですわい。」

皆が又笑つた。

制壓下の敵國の島かげに、夕闇がひろがり始めた。

食事よろしいに従兵長が届けてきたので、士官室へ下りる。



さあ今夜は、刺身が喰へるぞ。昇永水の中に手をつけてゐる間にも、私の腹はぐうと鳴つた。

## (十三)

○月○日(續)

急ぎ食卓につく。

全士官が揃つて、賑かだ。

食卓には、乾燥はうれんさうと胡瓜の煮たのが盛つてある皿が一枚のつてゐるだけ。刺身の皿は、まだ誰のところへも来てゐない。

いつもはすぐ従兵が盆に飯と澄し汁の入つた椀とを捧げて、とぶやうにしてまづ副長と機關長の前へやつてくるのに、今日はどうしたものか、誰もやつてこない。従兵もいつもは三四名が出てゐるのに、今日はたった一人しか出てゐない。それが暖簾のさがつた厨房窓のところで、もちもちしてゐる。

士官たちは、まだかといふ顔つきで、士官室厨房の方へ首をのばす。その間に、私の腹は、いぐどもぐう／＼鳴つた。

『おう、従兵長。』

髯の機關長が、うしろを向いて怒鳴つた。

返事がない。が、ちよつと間をおいて、暖簾の向ふで『はい。』と返事があつた。

『おい、何しとる。士官室總員食事を、べ方よろしい。』

食事をべ方よろしいとは、なるほどどうまい報告だ。

『おい、早く出せ。刺身が腐るぞ。』

軍醫長も催促である。

『は。今出ます。』

従兵長の顔が、厨房窓からぬつと出る。額には玉のやうな大汗をかいてゐる。皿に盛り分けるのに大車輪だつたらしい。

私のところへも待望の刺身の皿がことんと置かれた。

『お、たつた五片か。お代りやつていゝのか。』  
機關長の頓狂な聲。

『それで全部であります。』



『そんなことはない。運用長とわしとで、五ひきから釣つたぞ。骨と腸とが差引かれるにしても五片といふことはないだらう。おい調べてみる。』

『半分はガンルームが持つて行きました。通信長が機関長によく禮をいつといてくれといつとられました。』

『なにイ、通信長が……うわあ、さうか。』

とたんに機関長は鼻に皺しわをよせて髯ひげを引張つた。

『なにか通信長と約束があつたのかね。』

と副長が、目玉をぐるつと動かす。

『いやあ、さつきわしが黒鯛くろだひ一びき釣り上げたんです。傍へ通信長が来て半分呉れといふから、よろしいといつた。こつちは一びきの半分のつもりでよろしいといつた。全部の半分のつもりではなかつたんだが……もう手遅ておくれだ、ガンルームのことぢやから、もう皿の上はきれいに片附いてゐることだらう。』

さういつて機関長は歎息した。

私の皿の上の五片の刺身も既に消え失せてゐた。冷凍れいとうとはちがつて、新鮮な魚肉のあの甘い

味が舌の上に残つてゐる。うまかつた。手荒くうまかつた！

食事が終つて、卓子の上から白布が取除かれた。久振りにうち寛いだ夜が來た。たつた五きれだつたが、私は大いに満悦して、長椅子にじつと凭もたれてゐた。

ギターを鳴らしてゐたD隊長のところへ、分隊當番兵が來た。何か兩手に一杯持つてゐる。

『よし。その端はしの卓子の上に置け。』

ごそつと音がして、山のやうに積まれたものがある。D隊長はギターをやめて、傍へやつてきた。そして防暑服を脱いで裸になつた。それから當番兵のもつて來たものを一つ／＼身につけ始めた。草色のシャツ、草色のネクタイ、草色の下袴、草色の上衣……つまり陸戦隊の軍装である。ピストルの革囊かほくろからピストルを抜いて、D隊長は中をよく改めた。それから元へかへして、今度は皮のバンドをつけた。草色の帽子を被かぶつた。日本刀を吊つた。別人のやうな陸戦隊長が出來上つた。

D隊長の目が、私の目とちあつた。隊長は照れくささうに、につと笑つた。



## ソロモン掃蕩

(一)

○月○日

けさは『総員起し』の前に、ちやんと起床して顔を洗ひ、髭を剃り、そして身體を清めた。日頃に似合はぬこの早起きは、けふこそソロモン諸島の掃蕩戦に、私も出陣することになつたからだ。

陸戦隊は、各艦から出る。本艦からは、○個小隊が上陸する。

食事もどこへ喰べたかわからない。早速身仕度をして副長と挨拶、そして前甲板へとびだした。陸戦隊員に選抜された水兵たちは、日頃の眞白い防暑服を脱ぎ捨て、濃い草色の陸戦軍装にがつちり身を固め、鉢劍をつけて勢揃ひをしてゐた。

本艦陸戦隊の指揮官に任命された若きD隊長は、肩からピストルの入つた革囊をさげ、腰には

長い日本刀を吊つてゐる。見るからに勇ましい。これが、士官室で暇があればギターをぼつんぼつんと弾いてゐるあのやさしい隊長であらうか。これが、私とは食卓の席がとなり同士であつて、私の前で、頭髪のうすくなつたC隊長といつもからかひつこをして、親子漫才をやつて聞かせてくれるあのD隊長であらうか。私は驚歎の目を見張つた。

『陸戦隊員、整列。』

D隊長——いや軍艦○陸戦隊長は、日本刀をすらりと引抜き、全艦にひびき互るやうなでかい聲を張上げた。砲塔の蔭から水兵が顔を出して、おうと呻つて目をぱちくり。

人員點呼がある。それから携行繃帯、蚊よけ薬、食糧などが一同に渡される。私も最左端にきちんと並んでゐる。

それを先任參謀が見つけて、傍へよつてくる。

『やあ、海野さん。ご苦勞さんです。』

『いやあ。』

『お、貴方はピストルを持つてゐないな。おい取次……』  
と呼ぼうとするので、私はそれを押し停めて、



『先任参謀。ピストルは重いから、持つて参りません。』  
『重いから？ だが危険だから……』

『D隊長——いや指揮官に了解を得ておきました。つまり私は指揮官の傍から放れないことに決まりました。萬一の上きは、指揮官が私に代つてピストルを射つて下さるさうです。』

『なるほど。はゝゝゝ。』

『私は、報道に専念いたします。』

『まあ氣をつけていつて下さい。』

ピストルを斷つたので、先任参謀はこのごろ漸くりつばになつた泥鯨髭を左右にひつばつて、をかしくてたまらぬといふ顔をなさる。

いつの間にか、艦長が出て來られた。

『艦長に敬禮。』

若き指揮官の聲はいよゝ／＼大きい。

『指揮官〇〇〇尉以下陸戦隊員〇〇名、報道班員一名、合計〇〇名、只今より〇〇島掃蕩に出發します。』

艦長はうなづいた。そしてそれから掃蕩戦に対する訓示があつた。

『……敵あらば機先を制してこれを斃せ。敵國人あらば逮捕せよ。原住民には危害を加へることはもちろん威嚇することも禁ずる。但し帝國海軍に對し反抗する者あらば斷乎として斃せ……』  
そのへんで私は武者ぶるひが起つた。やつぱりピストルを借りていく方がいゝのではないか。が今更申出るのは遅い。えゝゝ一度決めたことは、そのとほりやるんだ。敵が出て來やがつたら拳固でもつて水月のところをどーんと一當て突き破つて臭い臟腑をつかみ出してくれる。

『乗艇！』

指揮官の號令によつて軍艦旗を先登に、一同乗艇する。私は約束の如く、最後に乗艇した指揮官の傍にびつたり寄り添ふ。

(一一)

〇月〇日(續)

〇隻からなる軍艦〇〇陸戦隊の乗艇は、遂に纜をといて、本艦から離れていく。  
艦上からは、司令官以下の戦友たちが、帽子をうちふつて見送つてくれる。感激に胸がふる



へる。

本艦が小さくなつていくにつれ目的の島影は大きくなつてくる。

本隊の掃蕩受持は、前方に見える一つの小さい島と、もう一つはその奥にある陸岸の一部であつた。

最初は小さい島の方だ。艇の上から、私は双眼鏡でその島をのぞいてみた。どうも無人島のやうに思はれる。全島は椰子の木とマングロープの木とで、足を踏みこむ餘地もないほど、ぎつしりと生ひ繁つてゐる。岸邊には、ところ／＼大木が枯れ、その太い幹が水中に頭を突込んでゐて、氣味がわるい。

もう一つの大きい島の陸岸には家が七八軒並んでゐるが、人影は見えない。そのうしろは深い密林である。一體何がとび出してくるか、陸岸はあやしげなる沈黙をまもつて、じつとこちらを睨んでゐる。

艇に備へつけの火器は、すぐ前方に近づいた小島の方にびつたり狙ひをつけてゐる。

近づいてみたが、やつぱり無人島らしく、人影は見えない。熱帯樹は重なり合つて生ひ繁り、その奥は陽の目もとほらない。何だか長いものが、地を匍つてゐる。あゝ鱈！と思つたが、見

直すと、それはやつぱり朽木の幹であつた。

艇は島を一周したが、遂に何の怪しいものも発見されなかつた。

指揮官は號令して、艇を陸岸の方に變針させた。いよくあの部落に目標はつけられたのだ。

艇上の警戒は一層嚴重となつた。火器はすぐでもぶつ放せるやう構へてゐる。指揮官はじめ各隊長の双眼鏡は揃つて注意ぶかく人家のあたりに動かない。刻一刻と、艇は陸岸に接近していく。

『どうも人がをらんやうだ。』

と、若き指揮官は双眼鏡から目を放した。

『よし、あの棧橋に艇をつける。』

いよく當つて碎ける決意がついた。狙撃員は一層緊張する。艇は未知の運命をのせて、前方の棧橋へ驀進する。

艇は巧に舵を引いて、棧橋へ接近する、それは半ば崩れかゝつた石垣式の棧橋だつた。

『進め。』

艇が横附になるよりも早く、隊員は銃をひつさげて、棧橋へとび上つた。そしてどか／＼と板を踏みならして、その奥にならんでゐる人家に向ひ、銃剣を閃めかして殺到した。



『なあんだ。どの家ももぬけの殻ぢやないか。』  
指揮官のがっかりした聲だつた。

もつと奥の方に建つてゐる島民の小屋らしい家を念入りに調べてみた。しかしこれもやつぱりもぬけの殻であつた。

『さては風を喰らつて逃げやがつたな。』

若き指揮官は、大刀を提げて、いま／＼しさうに空き家を睨みつける。

『おや、この家は日本人の家ぢやないか。』

指揮官の眼は早かつた。

腰巾着の私は、その聲におどろいて、前にとび出した。陸岸に建ち並ぶ二軒の家は、床を高くした粗末な家ながら、それでもこの部落の中では一等地つばな建物であつた。その入口に、白いペンキをぬつた四角な板がはりつけてあり、その上に黒いペンキで邦人の名前がローマ字で書きつけられてあつた。こんなところで邦人の名前を見るなんて、ちよつと想像しなかつたので、私はおどろきもし、そして強い感激にさへとらへられた。私は、眞先にこの小屋の中に駈入つた。

## (111)

○月○日(續)

その家の中には、一物もなかつた。

いや、古ぼけた棚が一つだけあつた。しかし棚には、何も載つてゐない。家財は、多分敵兵が悉く持ち去つたのであらう。

しかし私は、まだ諦め切れなかつた。何か残つてゐさうなものだと思つた。どんなものでもいいから、日本人の遺物を探しあてたいとねがつた。さうしたものが見附かれれば、私はどんなにうれしかしいのだ。

私は、棚の上によちのぼつた。そして棚の上を探してみた。

あつた!

果然、あつた。一冊の古本が載つてゐた。これだ! 私は手をのぼして、その古本をつかんだ。古本の表紙は、埃によれてゐた。ざら／＼と白い灰のやうなものが表紙の上からこぼれた。たしかにこゝ數箇月の砂埃が積りに積つたものと思はれる。



その本は、ずいぶん読み古したものと見え、表紙がちぎれた上を新しく厚紙を當てて綴り直してあつた。しかも日本綴だ。その上には毛筆でもつて『叱牛録』と書いてあつた。中をくつてみると修養書だ。この主人公が、日夜傍をはなさず読み耽けて、この天涯に於ける生活の修養の糧としてゐたものにちがひない。私は、大きな感激にうたれて、手のよごれるのもかまはず、幾度も表紙の上をなで、頁をばらばらとくつた。

家の周囲や埠頭を見て廻つて、どうやらこの家の主人公は、附近の事業主であり、よい貝釘となる高瀬貝を集めて商賣にしてゐたことが察せられた。主屋の前には、一艘のボートがあり、屋根のついたボート・ハウスの下に砂地に横たはつてゐた。このボートは、船底に大きくひびが入つてゐて、もうずいぶん永い間使用されなことが分つた。

この主人公は、今はどうしてゐるのだらうか。どこにゐるのであらうか。おそらく氏は開戦と殆ど時を同じうして濠洲兵につかまり、今ははるか濠洲の地に拉致せられて、あぢきなき抑留生活を送つてゐるのであらう。私は、その人の身の上を思つて暗然とすると共にわれ／＼國民は、この勇ましい先驅者の志をこのまゝ放置しては相濟まぬと感じた。

そんな感激にとらはれてゐるとき、向ふで指揮官の嚴然たる號令が響いた。

『〇隊はこれより奥地へ進撃する。そして、さつきもいつたとほり、敵國人を引捕へる。島民に對しては何もしてはならん。しかし反抗する者あらば、躊躇することなく倒せ。』

指揮官は、いひ終つて、ぴかりと日本刀を一閃、前方の密林を指した。かくして進軍が始つた。大きな軍艦旗が先登に立つ。そのすぐ後に、指揮官と〇隊長が征く。私は例によつて、指揮官の傍によりそふ。

鬱蒼たる密林だ。この中に、どんな怪奇な或ひは危険なものが潜んでゐるか分らない。見上げると人の背丈の二三十倍もあらうといふやうな椰子の木が隙間なく繁つて





ゐる。その間には蔓草が枝から枝へと匍ひ廻り、天日は全く遮られてゐる。雑草は完全に腰を浮し、やうやく頭だけがひよつくり出てゐるといふ有様だ。そしてぶん／＼と羽ばたきをたてて無数の蠅が汗にまみれた頬に首すぢにたかつてくる。びしやりと手で追ふと、ぐしやりとした氣持のわるい手應へがある。しかし人間を多分知らない蠅どもらしく、もう次の蠅の一團が、ぶんぶんと襲撃してくる。歩行は樂でない。

斥候が數隊、前方および左右を先行してゐるはずであるが、たちまちその姿が見えなくなつた。不意に、けつ／＼／＼と、けた／＼ましい鳥の啼き聲だ。そして大きな羽ばたきが聞えた。私はぎよつとして、思はず足を停めた。

『鶏がをります。』

右側の斥候が、草叢の中から大きな聲をあげた。しかしその姿は見えない。

## (四)

○月○日(續)

なあんだ、鶏が斥候にぶつかつておどろいたのか。

『さうか、放つて置け。』

軍艦旗の下の若き指揮官は、大きな聲で叫びかへした。

しばらく行くと、こんどは先登を行く斥候兵が叫んだ。

『ぶ、豚の子が草叢を横断しました。』

『放つて置け。』

指揮官はどなりかへして、前方の木立を睨みながら進んでいく。

『おう、バナナがなつてゐる。見事な房だ。』

こんどは私が叫んだ。手をのばせば届きさうなところに、青いバナナが房々となつてゐるのだ。近來すつかりくだものと縁の切れてゐる私が叫んだのも無理ではない。

『かへりに取ることにしませう。』

前に進む若い指揮官が、しづかにいつた。バナナを見附けてから私の氣分は急に樂になつた。

『ほう、パイヤがあんなところになつてゐる。あれは喰へるぞ、黄いろくなつてゐるから……』  
私が喰ひ意地のきたないところをむきだしにして叫んだ。

『あれも、かへりに取ることにしませう。』



指揮官は一々返答してくれる。太い竹のやうな砂糖黍とうきびが生えてゐる。青いいぼくのある丸いパンの實がなつてゐる。

こんな調子で、密林を行けば、くだものるゐるが歓迎してくれるばかりで、求むる人影は全く見當らない。そのうちに島民の小屋らしいものにぶつかつたが、こゝも無人。小屋のまはりには、さつま芋いもそつくりの葉をもつた植物が生えてゐる。試みにこれを抜いてみると、やつぱり赤味のある芋だつた。もつとも内地の芋と違つて、いやに凸凹でこぼこしてゐる。それでも私は、べら棒になつかしくて涙が出た。

そのうちに、道がなくなつた。

指揮官は、將校斥候を前方の偵察として出した。そして四十分以内でこゝへ歸つてくるやう申し渡した。

その間私たちは、小屋の附近で待つことになつたが、風もなく猛烈な暑さで、まるで蒸焼むしやきになりさうだ。氣のきいた隊員が、バナナやパイヤをもぎつて持つてきてくれるので、それを次から次へとごちそうになり、咽喉のどをうるほした。やうやく元氣になる。

四十分で戻つてくるはずの將校斥候が、どうしたものか一時間半たつても戻つてこない。隊員

一同大いに心配する。私も心配のあまり、バナナもパイヤの味も一時忘れてしまつた。

指揮官は信號兵に命じて、將校斥候の踏み分けていつた前方の密林へ向つて、いくどもラツパを吹きならさせた。

そこへ將校斥候が、眞赤まつかな顔をして、ひよつくりかへつてきた。全身は汗にまみれ、足は泥だらけだ。報告によると、やつぱり道を踏み迷つてゐたさうだ。そしてこれから先はますます深い密林と沼地ぬまぢで前進不可能である。人影は更にはないとのことである。

『それでは、こゝから引返すことにする。海岸へ出て、右の方を搜索さうさくする。』

と、若い指揮官は命令を發したあとで、海岸まで、持てるだけのくだものを持つていつてよろしいと附加へた。

そこで隊長は、それ／＼の兵をまとめて點呼てんこを終り、命令を傳へたあとで、

『……それから、總員にて、附近になつてゐる目ぼしきものを集める。』と號令した。

目ぼしきものとは、うまいことをいつたものだと、私はひとりで感心した。兵は大喜びで、早速目ぼしきバナナやパイヤの採集さいしふにかゝる。生の果實なまに不自由してゐる本艦では、さぞこのお



土産をよろこぶことであらう。

(五)

○月○日(續)

再び元の海岸へ出た。

そこで一隊は、直ちに右岸にそひ、索敵進撃をしていった。残る一隊は、所在なきにじつとしてもをれず、命令によつて附近にうろついてゐる主のないこはとり鶏と豚の子とを搜索し、これを捕らへることになった。

手わけして搜索を開始すると、一羽かと思つた鶏は、みんなで五六羽もゐた。色の黒い豚の子は草叢くさむらの中からきゅん／＼と鳴きながらとびだしてきた。そこでだいぶん賑かなことになった。子豚を追ひかけて走つていつた水兵の一人が、やつこのこと子豚を捕らへたとたんに、草叢ががさ／＼と大きく揺れたかと思ふと、とつぜん岩のやうに眞黒なものが、恐しい鼻息と共にその水兵に躍りかゝつたので、さすがの水兵さんも思はずわつと叫んで、子豚を高く差上げたまま逃げだした。見ると、後から毛の眞黒な子牛ほどもある親豚が、子豚の急を知つて反撃はんげきしてきた



のだつた。

姿をあらはしたのが運の盡きで、この親豚も四方八方からの水兵の投網に引掛かつて、たうとう縛り上げられてしまつた。敵兵を引きくゞつてくる筈の綱でもつて、親豚が縛り上げられてしまつたのだつた。子豚はみんな五匹つかまつた。私は島民小屋の柱に縛りつけられ、大きく息を弾ませはなてゐる親豚の豊かな肉づきをつく／＼眺めて、こいつはうまいことになつたと唾つばをのみこんだ。

指揮官は信號兵を呼んだ。そして沖合に碇泊いかりしてゐる本艦へ向けて信號を命じた。

『ワレ豚ヲ捕獲セリ、如何スベキヤ。』



この珍妙な信號をうけて、本艦ではさぞ面喰らつたことであらう。しばらくすると、返信がやつてきた。

『捕獲セル豚ハ本艦へ同行セヨ。』

こゝに於て、この二十餘貫の黒豚の運命は遂に定まつた。しかし豚は、そんなこととも知らず、柱にラツパのやうな鼻をおしつけ、荒い息づかひで睡つてゐた。さつきから猛烈に暴れたので、すつかり疲れてしまつたといふ風に見える。

私は汀へひとり下りて、あたりをぶら／＼歩いた。水は澄んでゐる。白珊瑚と、菊目石のやうな外觀をもつた珊瑚とが、浪に洗はれ、粉碎されて汀にごろ／＼してゐる。その間に何の木かしらぬが積木位の大きさのすつかり表面の磨滅した木片が散らばつてゐる。小さい貝殻が無數に落ちてゐる。と、その貝殻がつつうつと動いたやうに見えた。(おや、神経衰弱になつたか!)と、ちよつとびつくりしたが、よく見るとそれはやどかりであつた。氣をつけてみるとどの貝殻にも、小さいやどかりがちやんと收まつてゐる。それが、私が足を停めるとがさ／＼と匍ひ出すのであつた。私はその中からなるべく可愛いやつを三つ四つ捕らへて、ポケットに入れた。同室のC隊長へのお土産にと思つたのであつた。

海岸には、朝顔みたいな花が咲き亂れてゐて、私にちよつと郷愁を起させた。しかしその葉は日本の朝顔とはちがひ、萬年青のやうに硬くて艶のある厚い葉をもつてゐた。花を摘むと、莖の切口から白い乳のやうな汁が出てきた。郷愁に浸つてゐた私は、何だか急にこの花に突放されたやうに思つた。

『おうい、海野さん。』

私の名を呼ぶ者がある。ふりかへると、これはどうしたわけだらう、僚艦〇〇に乗組んでゐる管のトノサマこと南部記者がにこ／＼笑つて立つてゐる。私は夢ではないかと愕いた。

『やあ、どうしたんだ、一體これは……』

と、私が南部記者の手をきつく握りながらたづねると、彼は力づよく握りかへし乍ら、『掃蕩戦で、今この島を一巡したところだ。』と應へた。なるほど彼のうしろには、僚艦の陸戦隊員が隊伍を整へて並んでゐる。

(六)

〇月〇日(續)



『ずるぶん、しばらくだつたね。』

私は、南部記者に煙草をすゝめながらいつた。

『本當にねえ。海野さん、これをやりたいねえ。』

と、南部記者は将棋の駒をさす手つきをしてみせた。

『うん、将棋か。一番さしたいが、あんたに會ふとは思はなかつたから、駒を持つてこなかつたよ。』

『冗談ぢやない。』と南部記者は哄笑して『いづれそのうち、僕の方からさしにいきますよ。』とすつた。

『報道班員！』

と、南部記者を呼ぶ聲がした。僚艦の陸戦隊が行軍を始めたのである。

『ぢや、元氣で征つてきたまへ。』

『ありがたう。きつとそのうちにこれをやりませう。』

南部記者は、もう一度将棋をさす手つきをして、向ふへいつた隊の後を追駈けた。私は、彼の腕に巻いた報道班員の赤い腕章が、椰子の林のかげにかくれるまで見送つてゐた。

(ふーん、錦繪にしきゑのトノサマも大分潮やけて、野武士みたいになつたぞ。)

そのうちに、島の右岸に沿ひ索敵行軍をやつてゐた一隊が、がっかりしたやうな顔で戻つてきた。

『報告。右岸方面、異状なし。前方〇〇メートル附近より密林は汀なぎさに伸び……』

と、隊長が指揮官に詳細報告をする。そこで指揮官は、これをもつて掃蕩戦は終了したことを宣し、隊員一同は捕獲品を護つて本艦に引揚げの命令を發したのであつた。

ところが、その引揚げは簡単にいかなかつた。そのわけは、二十餘貫の黒豚先生を艇に載せるといふ仕事があつたからである。

何しろ黒豚先生には話が通じないし、銃剣もピストルも何の嚇おどかしの役にも立たず、おまけにさきほどから黒豚先生の感情を大いに害してゐるといふわけで、氣輕に舟艇へ乗つてくれず、さすがの勇士たちも手を焼くこと一とほりではない。

結局、隊員總がかりで、綱つなを引張るやら、後からはやしたてるやら、棒でもつてぶんなくるやらして、やつと黒豚先生に立ち上つてもらひ、艇の上に追ひ込んだ。

追ひ込んで一安心と思つたところ、黒豚先生はこんな狭せまくなるしい艇の上は御免だとばかり、そ



のまゝ甲板の上を通りすぎて海中へ飛び込む氣配を示したので、それを引留るためにまた一騒ぎだ。何しろ狭い艇内には、隊員がぎつしり乗つてをり行動も自由でない。そこへ氣ちがひのやうになつた荒豚先生を押し込んで溫和しくさせようといふのだから、なか／＼事面倒だ。仕方なく四本の足に綱をつけ、四方から引張り合ひ、どうと顛倒するやつを艇長席の上へ曳きずり、航海中海へとび込むおそれのないやうにと、からだの上からぎり／＼と綱を幾重にもかけ、やうやく一段落となつた。子豚も鶏も載せ終つた。

『放せ！』

と指揮官は、艇を棧橋から放させた。そして黒豚先生の様子をうかゞひながら、なるべくしづかに艇をあやつつて、本艦へ戻つてきた。

本艦では大悦びだ。隊員が無事歸つてきたのよりも、捕虜の黒豚を早く見ようといふので、インドレールや砲塔の上から、こつちへ向けてしきりに水兵の頭がゆれる。

嚴重な消毒が、噴霧器で行はれる。舷門で再び暴れだした黒豚先生にも丁寧にしゆう／＼掛ける。するとたいへん溫和しくなつた。

隊員一同前甲板に整列する。艦長が出てこられた。指揮官は隊員異状なきことを報告し、

『全島、更に敵影及び人影を見ず……』

と詳細に報告し、この日の掃蕩戦を終了した。

(七)

○月○日(續)

陽はまだ落ちない。

陸戦隊指揮官——いや、今では元のD隊長に還元したが、そのD隊長が艶々した顔に濡れ手拭をぶらさげて士官室へぬつと入つてくる。

『從兵。水を呉れ。』

『はい、グラス一個。』

從兵のついで出す冷却水を、一息にぐつとあふる。實にうまさうだ。

『もう一杯。』

『は。』

D隊長の顔は、今日一日の掃蕩戦にすっかり陽やけして、額のところにはくつきり線がついて



ゐる。まるで海水浴にいつて陽やけしたやうである。

「D隊長。すゐぶんやけましたね。」

と、私は長椅子から聲をかける。

「ぴり／＼します。今に皮が剥けますよ。」

全く強い日射であつた。私は縁のある帽子を被つてゐたので、顔は大丈夫だ。しかし汗瘡がどつと出てきた。

従兵が私のところに来て、入浴よろしいを届けてくれる。特別に早風呂だ。やれ／＼ありがたいと、D隊長の後にバスルームに入り、バナナくさくパイヤくさく椰子くさい汗を洗ひ落とした。今日はまたインキンがひどくなつてゐることを發見。

午後五時の食事がすむと、士官室は空になる。間もなくたつ／＼たあと出港用意のラツパが鳴る。忙しい。がら／＼と錨があがる。

舷側から乗りだして、紐のついた錘をびゆうと海中に投げ込んで水深を測つてゐる水兵の聲、

「ふたじふはアチ——しづウかに、すゝみまアす。」

いゝ聲だ。これは艦内で只一つの追分情調である。しばらくすると、また錘をびゆうと放り

込む。

各艦共に動きだした。

夕焼雲が、またすばらしく美しい。繪のやうなソロモンの島々がしづかに後に下つていく。原住民がカメラを漕ぐ手を停めて、こつちに見惚れてゐる。今ぞ、くろがねの大艦隊はソロモンを去り行く。行手には眞黒なスコールの雲があつて、しきりにびかり／＼と稻妻が飛んでゐる。潮が早くなつた。

絢爛たる夕焼雲の色が褪せつくすまで私は見終つてから、士官室へ下りていつた。

黒板の全面が細かい字でぎつしり填められてゐる。

「——ラエ上空、米機多數來襲、雷撃及ビ爆撃ヲ行ヒツ、アリ。」

「敵米艦上機、陸攻機來襲。味方若干損害。一〇三五敵機避退セリ。」

「モレスビー南々西〇〇海里ニ敵ノ大部隊見ユ。航母一、甲巡二、驅逐五。針路南東、速力〇

〇節。

ラエがやられた。こつちの攻略部隊及び輸送船團が突如〇〇機の敵空軍の襲撃をうけたといふのである。〇〇機の來襲は近來になき大空襲だ。心配になる。



「たいへんぢやないですか。残念ですね。」

私は飛行長に話しかけた。

「やつぱり敵の航母がゐたのですねえ。サラトガらしい。モレスビーの南〇〇海里では、どうにも手が届きません。」

飛行長も無念の思ひ入れである。

損害の報告が、ずらりと並べあげられてある。

士官たちは黒板を睨みながら、戦友の身の上をしきりに案じてゐる。

「畜生。こつちが珊瑚海を覗いたときに、あの敵の機動部隊が出て来ればよかつたのに……」

「どこまでいつても、わが〇戦隊は不運ぢやのう。」

「いや、この調子では、必ず近いうちに敵機動部隊を捕捉できる。冬来りなば春遠からじだ。」

「春遠からじか。内地ぢや今正に春たけなほだなあ。」

「櫻の花を見ざること、もう何年になるかなあ。」

「そのうちにニューヨークへいつて観艦式くわんかんしきをやるから、そのときは日本から移植いしやくの櫻が見られるよ。」

## 警戒 碇泊

(1)

〇月〇日

総員起しの前に、ちゃんと目がさめる。習慣はおそろしい。身體が方々痛んでそして睡ねむい。それを氣にしてゐるうちに又睡る。

ぱつと目が覺めた。食事よろしいの届出があつた。従兵長の聲だか、それとも違つてゐたか、よくは憶おぼえない。今日は下のベッドのC隊長の方が早く起きる。隊長はがらくつと洗面器を明けて洗面を始める。

三度目に目を覺ましたときには、C隊長の姿は最早室内にない。失敗しふせいつた。

こいつはいかんとベッドから飛び下りる。大急ぎで面を洗ひ、残りの水で背中や胸をこする。身體がだるい。こりやたしかに昨日の掃蕩上陸の疲労が出たらしい。



士官室の食卓には、既に全員お揃ひである。

『お早やうございます。』

『やあ。』

食卓につく。

『先生今日はお疲れの模様でしたね。』

右前の席の老C隊長がいたはつてくれる。私は隊長が洗面をすませて部屋を出られたのを知らなかつたと話した。

隊長はうなづいて、

『今朝は起さないのがえゝぢやらうと思ひましたからな。先生は割合ひに顔が日焼けしてゐませんね。ふーん。』

私がそれに應へようとしたとき、老C隊長の前の席の昨日の陸戦隊司令——いや、今日は元に戻つて若きD隊長であるが、そのD隊長が横合ひから口を開き、

『海野さん、このひとは、わしの面が日焼けしたのが氣に喰はんといふのです。』

『氣に喰はんといはん。朝から一升酒をやつたやうなお顔で、景氣がえゝこつちやというただ

けのことですよ。』

と老隊長が、私に返事をさせないで話を引取る。また例の仲よし親子漫才が始つたのである。士官室では、年齢の兩翼端をなす老C隊長と年少D隊長とは、双方から何かタネを探してはかうして親子漫才をやつてゐるのである。とにかく今朝のD隊長の顔はなるほど眞赤に焼けてゐる。昨日歸艦して、顔がびり／＼するといつてゐたが、今日はそれが眞赤になつてゐる。

『一升酒をやつたやうな面だといふことは、氣に喰はんといふ意味ですよ。』

若きD隊長は、酒を大いに嗜む方であり、老C隊長は一滴もやらない方だ。

『先生の顔を見なさい。ちよつとも焼けとらんでせうが。普段あまり年寄を苛めちよるけん、熱帯の天道さまがちよつぱり紫外線といふ唐辛子をあんたの顔へなすりつけたのぢやらう。今にびり／＼して来て、顔の皮が剥けることぢやらう。』

『剥けようがどうしようが、わしの面を年寄が氣にすることはない。』

『剥けでしたら、こつちは御飯がまづくなるぢやらうと思つて、えらう氣にしとるのぢやが、眞前で食事をする身は、氣にしますよ。』

『あ、あんな御大層なことを……』



とにかく今日はD隊長の歩がわるい。なにしろ顔が辨慶のやうに眞赤に焼けてゐて、至極目に立つ。自らそれを大いに照れてゐる程の純眞なD隊長だから、精神的にいつても歩がわるいのだつた。

親子漫才が始ると、私は只黙つてにこ／＼して聞いてゐればいゝので、私に話しかけられたからといつて、決して返答をすることはしないのである。必ず口を休めてゐる方が代つて相手に出てくれるのであるから。そしてこの親子はかはる／＼交替に笑つたり澁い顔をしたりする。それを見較べてゐるのも亦楽しいことであつた。

『さあ、そろ／＼入港の用意ぢや。』

と老C隊長は海苔罐の蓋をすると、席を立つた。八時二十分には、〇〇に入港、十一時から油槽船〇〇が本艦に横附となつて給油作業が始る豫定になつてゐた。だから午前中はなかく忙し。

が、食事が終つた私は、部屋へ歸つてベッドに登つた。

## (11)

〇月〇日(續)

從兵が入つてきて、舷窓をあけてくれたので、〇〇へ入港したのだと知つた。

それでも私はベッドから起き上らうとしなかつた。睡い、そして身體がだる。

入港用意のラツパが鳴つたので、びつくりして目を覺ます。

そこへ從兵長が入つて来て、食事よろしいと届ける。午前十一時だ。

『從兵長、急に出港とは、どうしたのかね。』  
と訊くと、

『油槽船〇〇に横附して給油をうけるのであります。』

と説明してくれた。

士官室へいつて食卓につく。見渡すと、席はまばらだ。甲板關係、航海關係の士官は、みんな上に出てゐるらしい。

舷窓は閉ぢてゐたが、食事の最中に從兵がこれを開く。すると窓の向ふに〇〇の風景が見える代りに、鼠色の船腹が窓から手の届きさうなところにあつて、視野を妨げてゐる。それは油槽船〇〇の船腹だつた。本艦は今その横腹へ繫留を完了したわけであらう。



食後、上甲板に出てみる。

甲板の景色がすっかり變つてゐた。油槽船〇〇と本艦とはびつたり腹を合はせてゐる。上甲板が二倍に廣くなつた感じだ。いや三倍だ。〇〇の甲板を越して、その向ふ側に僚艦〇〇の甲板がびつたりついてゐる。つまり油槽船は二つの巨艦を左右兩舷に抱いてゐるのだ。

ハンドレールから下を覗くと、太いパイプが二つの艦と船とを繋いでゐた。いま油はあのパイプの中を通つて盛んに本艦の中へ流れ込んでゐるのだらう。全く御苦勞さまな油槽船である。赤道をまだ南へ越したこの〇〇灣まで、よくぞ無事に來られたものである。敵の潜水艦はこの頃盛んに出沒してゐるといふ噂があるのに……。

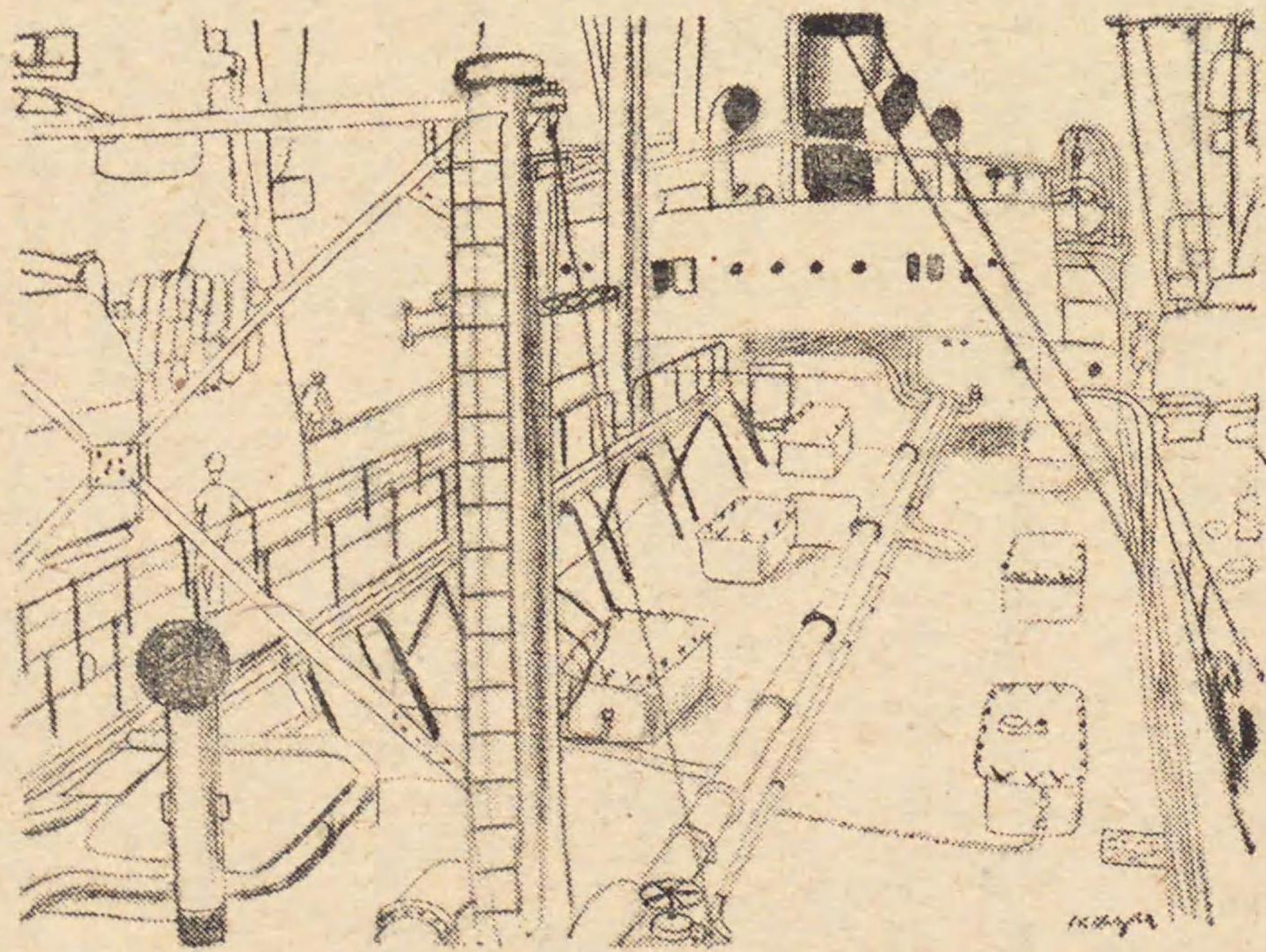
私は油槽船の甲板の上にとびまはつてゐる下士官や水兵たちの顔を一人々々眺めた。艦橋の上に、双眼鏡を吊つて、にこ／＼笑ひながら立つてゐる艦長の顔を眺めた。その横に立つてゐるのは本艦のA隊長だ。久振りで再會して交歓のところと見えた。A隊長もいつもの厳しい顔をうれしさに崩してゐる。

甲板と甲板とを繋ぐ假設通路の上を、こつちの水兵が向ふへ渡つたり、向ふの水兵がこつちへ渡つたりして仲々忙しい。こつちから椰子の實にパイプが渡つていく。向ふから雑誌と新聞と

が渡つてくる。こつちの甲板の上で、桃色のラムネの入つたコップを空にすかしてみながら、うれしさに口へ持つていく、あちらの特務士官もある。

『おい／＼、××ぢやないか、××兵曹。』  
向ふの船の舳に近いハンドレールから鐘  
膺髭の下士官が半身をのりだして、こつち  
の甲板へ呼びかけてゐる。こつちの甲板で  
は、しきりにロープ捲きをやつてゐる〇分  
隊の兵曹が、作業の手はそのまま續けなが  
ら、目をぱち／＼。

『おー、××だらうが……』  
こつちの兵曹は、ロープを捲き終ると、  
一聲呻つて、こつちのハンドレールにとび





つくやうにして向ふへ身體をのりだす。

『やあ、□□兵曹でしたか。』

こつちの兵曹は眼を輝かせてゐる。

『さうぢや。□□ぢや。おぬし、まだ生きとつたか。』

話の具合では、向ふの鍾馗髭兵曹は、こつちの××兵曹の元の上官であつたらしい。それが數千海里の波頭を乗り越えたこの○○灣で、再會の場面となつたものらしく兩方とも大感激に身をもてあまして、急に言葉も出ないらしい。

『まだ生きとつたか——は、相變らず口が悪いですね。□□兵曹は召集されたんですね。』

『さうぢや。○年ぶりで再び御奉公ぢや。今ぢや貴様の方がすつと上官ぢやないか、はつ／＼はつ。』

と、鍾馗髭の兵曹は腕の徽章きざしを叩く。

『さ／＼。』とこつちは照れて『呼ばれても、始めはさつぱり分らなかつたですよ。いゝ髭ですなあ。』

『ふ／＼。これは大東亞戰鬚ちふのぢや。ときに貴様は何か手柄たてを樹てたか。』

『大したことはありませんよ。□□兵曹、そつちは酒はありますか。』

『酒はいさゝか廻りかねるね。』

『それぢや、ちよつとこつちへ來て下さい。幸ひに昨日一升壘しやうりを手に入れましたから。』

『さうか。油槽船あぶらぶねとちがつて、やつぱり○○艦はがうぎぢやね。それぢや今行くぞ。構かまはんか。』

『今すぐ來て下さい。』

『よおし行くぞ。待つとれ。はつ／＼。』

『はつ／＼。』

横よこに立つて見てゐる私も、共にはつ／＼と笑ひたくなつて、それを我慢するのがに弱つた。

(111)

○月○日(續)

午後もベッドに登つて休憩する。もう相當睡眠すゐみんをとつたが、それでもまだ睡れる。不思議なものだ。その代り夢ばかり見る。白晝の夢は怪奇なるものの連続で、仲々のしい。

そのうちに又目が覺めた。下へ下りて、煙草を一服やる。腹が減つてたまらぬ。机の引出しか



ら給與のパイ罐を取出してあける。うまかつた。もう一罐喰ひたいが、我慢する。これはこの次の出動のときあけるとしよう。

上甲板へ顔を出す。

さつきまで横附となつてゐた油槽船〇〇は、既にをらぬ。港内を見廻して、やつとそれを見つけた。別の艦が二はい、びつたりと兩方から寄りそつてゐる。油槽船のお母さん役も、なか／＼たいへんである。

舷門のところ、ごたく／＼してゐる。機關部員が整列してゐる。そこへ擔架が搬ばれてくる。軍醫長が服装をと／＼のへて現れた。上陸する様子だ。擔架を招いて、舷門の前に下ろさせた。消毒器を持った兵が、舷梯を下りていく。下には舟艇しゅうていが待つてゐる。

艦長が出て來られた。

軍醫長が敬禮をして、擔架の方へ跣かぶむ。

『おい、艦長が來られた。』

擔架の中の毛布が動く。ちやんと下士官の帽子を被つた若い顔が現れる。顔が青い。急性肺炎になつた機關部の兵曹だ。自分で帽子を脱ぐ。汗の玉が額ひたいに一杯だ。機關長がそれを見て、ハン

カチで拭いてやる。

艦長は擔架の中を覗のぞき込む。

『〇〇機關兵曹。早くよくなつて歸つて來いよ。』

と、やさしい言葉をかける。

病兵曹は、寝たまゝ手を舉げて敬禮、そして唇をふるはせる。感激に聲も出ないといつた有様だ。

『よし、出發。』

軍醫長が聲をかける。

擔架の傍に、大勢の顔が集つてくる。これから上陸入院の病兵曹に、皆々聲をかけて勵ます。

『おい、後のことは心配するな。』

『短氣を起すな。早く歸つてこい。待つてゐるぞ。』

『右の腋わきの下に、サイダーが入れてあるぞ。』

これはいづれも機關部の戦友たちだ。

擔架たんかに覆おほひがかる。



『氣をつけて、ゆつくり下ろせ。』

軍醫長は指揮に忙しい。

擔架は舷梯を下りていく。擔架を擔ぐ戦友が六名、顔を眞赤にして力をためてゐる。舟艇しゅうていに乗り移るのが一苦勞だつた。擔架はエンジン・ルームの明窓あかりまどの上に縛りつけられる。艦長が上からしきりと、その縛りつけ方を指圖する。

舟艇は艦を離れた。機關部員は、ハンドレールから身體をのりだして、遠ざかりいく舟艇を見送る。皆心配さうである。

熱帯下にも急性肺炎になる者があるのだ。機關室の暑熱は、筆紙に盡しがたい。さればこそこのやうな尊い犠牲が出るのである。殊に今は戦争の最中なので、みんな實に頑張るぐんば。そして少し位身體が悪くても、仲々申告しない。それがいけないのだ。申告したときは、もう餘程重態になつてゐる。しかしその心根を思ふと、全く頭が下る。

それと入替りに、豫備機關少尉が一人、着任する。新しいC隊士ださうだ。總員前甲板集合の號令がかかる。副長から、その紹介がある。ガンルーム入りだ。

あとで士官室で話が出る。

『するとC隊士は二人出來たわけぢやな。』

『仲々ナイスボーイだ。』

『罐かまは氣の毒ぢやが、身體はいゝらしいから、當分勤まるぢやらう。』

『えらく色の白い男だなあ。』

『いや、内地の男は皆あの色ですよ。私達が皆黒すぎるのです。』

『黒すぎるといふが、ハワイを潜水艦で攻撃して來たG隊長の黒さは、ありやどういふわけかな。パプア族そのけぢや。潜水艦に乗つてゐて、なぜあのやうに眞黒焦げまっくろに焦げるのか譯が分らんぞ。』

『あれは地色ちいろですよ。』

『まさかね。』

『いや、さうです。この間G隊長がエフユウ(禪のこと)を外したところを見たが、均等に黒かつた。だからあれは地色です。』

『ふーん、さうかね。紫外線がエフユウを透過とうかしたのぢやないかね。』

新任C隊士の話が、變針へんしんして妙なところへはいつていく。



○月○日(續)

夕刻軍艦旗が下ろされた後で、副長に随つて後甲板へ出る。昨日ソロモンで捕獲した子豚が、後甲板に飼はれてゐるといふ噂を耳にしたからである。

なるほど、後甲板に蓆むしろが敷いてあつて、その上に酒の空箱がのせてある。その上に赤ペンキで、『豚を愛せ』だの『養豚係やうとんがかり』だのと書いてある。

副長はその傍に歩みよつて、箱を覗きこむ。そこへ一等水兵が来て、敬禮をする。

『豚の子は何匹ゐるか。』

副長が訊きく。箱の中には、やはらかいきれが敷いてあつて、私には見覚えのある眞黒なのが一匹、白と黒の斑まだらなのが一匹、互ひによりそつて、ぐうぐう睡つてゐる。

『二匹であります。』

と、養豚係の一水が答へる。

『昨日は三匹をつたぞ。もう一匹はどうした。』

副長は、子豚について仲々詳くわしい。さうでもあらう、副長といふ役柄やくがらは、艦内に於ける大小何のことであれ悉すつ皆知つてゐなければならぬのだ。

『は。』

養豚係が、ちよつと言葉につかへる。

『昨日までは三匹でありましたが、今朝になりましたして點検すると二匹になつてをりました。』

『ほう。残りの一匹はどうした。』

『は、艦内を隈なく搜索しましたが、見附かりません。で、一匹は目下行方不明のまゝであります。』

『ふーん。ゐないことはないだらう。もう一度念入りに搜索せよ。』

『はい。もう一度念入りに搜索します。であります。その一匹は本艦から逃げ出して溺死なせしたのだらうと云つてゐる者があります。』

『子豚は箱から出で甲板を自由に歩行するやうになつてゐるのか。』

『は、子豚は巡検後は箱の中から出られないのでありますが、不思議ふしぎであります。』  
副長がにやつと笑つた。



「ふん、さうか。そんなら子豚は人間の腹の中へ逃げ込んだのだらう。捜索には及ばんが、後の子豚は嚴重保護を加へよ。」

「は。」

昨夜のうちに、早いところ誰かが子豚を喰つてしまつたらしい。副長の目は高き。

副長は再び箱の中を覗きこんで、

「子豚はどつちも弱り込んでゐるやうだね。」

「はい、しかし残飯をよく食ひます。そして今日は糞をしました。糞は仁丹より一まはり大きいのをやります。」

糞の大きさまで、養豚係は説明した。それでみると、仲々この子豚は可愛いがられてゐるらしい。

「それからこの子豚は明日陸揚げをして〇〇地の主計へ引渡すから、そのつもりで用意をしておけ。」

「は。」

「本艦では生きてゐる豚を飼つて置くことは出来ない。分つたか。」

「はい、分りました。」

養豚係の一水には、どう分つたのであらうか。副長の言葉には含蓄があるやうに思ふが……。

今日は晝寝をしたお蔭で、夜になつて目が冴えかへる。

こんなときこそ仕事をすべきであると思ひ、自室に於て例のとほり越中禪一つで、原稿を書き始める。これは『熱帯戦線必携品談義』と題したもので、今後こつちへ来る人たちの参考になるやうな事柄を書き綴る。

午後十一時、稿半ばのところへ、従兵が冷却水をコップに入れて持つて来てくれる。ぐつと飲み乾せば、そのうまいこと。

午前二時、遂に脱稿す。これで、せつかく元氣恢復した身體が、またたく間に。

(五)

〇月〇日

目が覺めると、ばかに暑くるし。

下のC隊長も、こりやどうしたんぢやらうかと、暑さをこぼす。



士官室へいつても、この殺人的暑くるしさの話である。

元來碇泊中は涼しいといふ原則があるのだ。なぜならば、碇泊中は、罐の方もさうひどく油を焚いてゐないので、艦内に籠もる熱氣も比較的低い。また晝間は舷窓が明け放たれるので、風があらばそれが入つてくる。ところが昨夜來の暑くるしさは、この原則をうち破つた。そこには何か譯があらう。

上甲板へ上つてみて、始めてその譯が分つたやうな氣がした。上甲板は眞白だ。砲塔も眞白、ブームも眞白だ。傍に碇泊してゐる僚艦も、雪が積つたやうに眞白だ。

火山灰だ！

灣頭を扼する火山を仰ぐと、噴煙濛々。火口のあたりに、びか／＼と赤い閃光が見える。いっになく、ものすごい噴火だ。

私が立ち竦んでゐると、そこへ司令官が來られた。敬禮。

『海野さん。こはいですねえ。あの山の様子は、どうです。』

『はい。すごいですなあ。』

『見れば見る程、氣持が悪いですね。』

司令官は、をかしいほど火山をこはいといはれる。いかなる敵の大艦隊が押しよせても、またいかなる敵の空襲部隊が來ても、ついでや眉一つ動かされたことのない司令官が、噴煙しきる火山を仰いでこはいといはれるのだ。私は司令官が急に慕はしくなつた。

山は、いつになく、火口から中腹へかけて、雪をかついだやうに眞白だつた。そればかりではない、風下の低い山々、森林までも、眞白になつてゐる。とき／＼がう／＼と山鳴りの音が響いてくる。空は灰色に包まれ、天日もためにくらしい。

甲板大掃除の號令が掛つた。

たちまち各隊の勇士たちは、箒を持ち、雑巾棒をとり、甲板へとびだして來て、大掛りの掃除が始つた。海水をホースでじゃあ／＼と流す。私は下へ逃げ込む。相濟まんわけだが、上にゐては邪魔になるばかりだ。自室も暑い。士官室が一等涼しい。しかし舷窓からちら／＼と火山灰が吹き込んでくる。それが汗まみれの首筋にとまつて、しばらくするとひり／＼痛くなる。この火山灰には多量の硫酸鹽が含有されてゐるさうな。

晝食の時間となる。

従兵が持つて來た皿の中を一目見て、は／＼と私は嬉しくなつた。厚い白い脂身のついた肉が



チョコレート色に焼けてゐた。ナイフで切つて口に入れる。うまい。大いにうまい。ポーク・チャップである。

『D隊長、御馳走さまです。』

私は左へ顔をひねつて禮をいつた。

『いやなあに。いよく出て來ましたね。』

『すてきにうまいです。』

『ちよいといけますね。』

一昨日のソロモンの豚が遂にポーク・チャップに化けたのである。肉の片きれが小さくて残念であるが、全艦に分配するとなると、これ位にしかならぬのであらう。

食卓のあつちからもこつちからも、豚だ、あの豚だと、聲がかゝる。大悦おほよろこびの人が過半数だが、あまり悦んでゐない士官もある。

髭の機関長は大満悦の一人である。

『D隊長。今度又ソロモンへ行つたら、もう一匹頼みますよ。』

『もうをりません。』

『いや、一匹取逃がしたと誰だかが報告しとつたよ。この牝豚めすぶたの亭主が残つてゐる筈だ。』  
機関長は例によつて早耳である。

『D番。この牝豚は、誰が殺したのかね。』

肥つてゐることではこの牝豚にひけをとらない砲術長が、フォークを使ひながら訊く。

『さあ、誰が殺したのですか、知りませんね。』

D隊長が迷惑まごさうに應へる。砲術長はD隊長の直屬上官である。持つて歸るまでは自分の任務だつたが、それから先のことは知らない。

『主計長。この牝豚はどうして殺したかね。』

砲術長の首が、主計長の方へ向く。

『艦上へ引上げてから間もなく、自然に息を引取りました。』

『えつ、自然に息を引取つた。そりやいかん。さういふ斃死へいしした豚を喰つちやたいへんだ。』

砲術長は、おどろいてフォークを投げ出す。私も嘔おほみこみかけたやつが、ぐつと咽喉のどに悶もへた。



○月○日(續)

ポーク・チャップの皿を前に、顔色をかへる士官と、知らん顔をしてむしや／＼頬張る士官と  
二派に別れた。

『わは／＼。』

軍醫長が大きな聲で笑ひ出したので、またぎくんとなる。

『この肉は喰べても異状なし。わしが引受けますよ。』

『おい、あまり嚇かすなよ。軍醫長が引受けてくれると聞いて安心した。』

と機關長はフォークを取上げ、一口頬張つて置いて、

『うん、やつぱりうまい。これなら當りやせん。』

『軍醫長。自然に息を引取つた豚でも安心できるかね。この軍醫長、どうも信用できんぞ。』

『いや、大丈夫だ、保證する。豚がトン死をしたといふので、私が検屍をしました。なるほどと切れてゐる。が身體に異状なしだ。しかし死因が分らん。そこで取扱者を集めて訊問した結果、トン死の理由が明瞭になつた。死因は消毒が原因だ。』

『消毒？ 消毒とトン死との連絡が分らん。』

『つまり、陸戦隊が歸つてきたとき、私が命令を出して持ち歸つたものを舷門で皆念入りに消毒させたんですよ。バナナやパイヤをやつた後で、最後に豚が舷梯を登つて來たので、係の兵がこの豚も念入りに消毒した。そしたら間もなく死んださうな。』

『了解できんね。』

軍醫長の信用は仲々恢復しない。

『豚を消毒するのに、陸戦隊員と同じにやつたのがいけなかつた。』

『は、あ、石炭酸をぶつかけたな。』

機關長には漸く分りかけた。

『さうなんだ。噴霧器で石炭酸をぶう／＼念入りに引掛けたんだ。尻の方だけやつて置けばよかつたのに、豚公の顔の正面に噴霧器を据ゑてぶう／＼やつたさうだ、しかも念入りに……』

『無茶をしよる。』

『それ以來、牝豚夫人は急に元氣がなくなつて、やがてトン死したといふ事情が判明した。さういふ死因だから、喰つても大丈夫だ。』

『ふーん、石炭酸で豚はそんなに簡単に死ぬものか。可哀さうなことをした。』



「おかげで、わしの方は手数が省けました。」  
主計長が結びをつけた。  
一座は爆笑した。

その爆笑が一段落ついたとき、老C隊長が士官室へ入つて来て、私の右前の食卓についた。従兵は早速、問題の豚料理の皿をその前に持つて来て置いた。

「いや、今日は罐の手入れで骨を折つた。」  
といひながら、フォークを豚肉につきたてた。

そのとき前にゐて、C隊長の手許を窺つてゐたD隊長が、にやつと笑つて、  
「おやちさん。その肉は、わしが持つて歸つたあれですよ。」  
といつた。

「えっ。」

と老C隊長はフォークの手を停めた。

「あの豚の肉か。これは喰べるまゝ。」

C隊長はあわててナイフの先で、そのうまさうな豚肉を皿の端へ移動した。

「あれ、喰べないですか。すてきにうまいのだがなあ。」  
私も勿體ないと思つた。

C隊長は、それに添へてあるジャガイモをフォークにつきさしながら、

「甲板へあがつてきたときの豚の顔を、私はよく覚えとる。あの顔を思出すと、よう喰べん。あの大きな豚が、鼻と口とからたら／＼粘い汁を出して……いや、胸が悪くなつた。」

「氣が小さいなあ。」

「あれを見とつた者は喰べられん。あんたを恨んで、こんな顔をしとつたぞ。」  
と、老C隊長は口と鼻とをくしゃ／＼にして、D隊長の前へつきだす。

「そんな顔にしても、さつぱりこたへん。」

「今晚あたり枕許へどろ／＼と出てくるぞ。」

「出て來たら、またそいつを仕止めて、おやちさんにたくさん喰べさせてあげよう。」  
そろ／＼親子漫才が始つたやうである。



○月○日

朝起きると、まづ上甲板に出て、對岸の火山の様子を窺ふ。今日も亦、噴火熾烈を極めをる。火口あたり、噴煙奔騰し、岩塊跳ねとぶ有様まことに物凄し。

○○にて敵の空爆により損傷したる艦船入港し来る。

○○艦より、副長のところへ平板讓受けに来る。

その使ひの工作兵曹は、戦帽の下から頭部の繻帯をのぞかせてゐるさまも痛々し。敵の奴めと、大いに腹が立つ。

損傷駆逐艦を、本艦と僚艦○○とで、それ／＼急速に修理することとなつた模様である。

午前○時、遂に敵機わが艦上に現れる。雲を利用し、突如山の方から手荒きスピードにて侵入、爆弾十數發を落として灣口の方へ飛び去る。灣内の艦艇からは高角砲を盛んに打ち揚げたが、命中せしや否や不明。

わが戦闘機は直ちに敵機隊を追跡して、彼方の雲の中に機影を没す。敵も早業、こちらも早業なり。

面白きは戦場である。



決戦の緊張のとき來るかと思へば、決戦に及ばずしてその機會去り、任務終了して弛緩の時來る。弛緩の最中に、又突如として敵來襲の警報に緊張、直ちに出撃となる。明日の運命はどうなるかさつぱり分らぬところに戦場に在るの面白さがある。緊張も弛緩も、すべて永續しさうでゐて決して永續せぬところがまことに面白いのである。

損傷の駆逐艦○○は、いよ／＼本艦の右舷に横附となつた。遅くとも明日までに修理を完了する見込だとのことで、早速全艦總出にて修理にとりかゝる。戦隊機關長と機關長とが工作班を指揮して、火事場のや



うな忙しさである。

私はなるべく邪魔にならぬやうに努めながら、無念の涙をのみつゝ、この横附にされたわが弟分の駆逐艦の様子を見まもつた。

敵爆弾が中にて炸裂してゐる模様だ。

その内部には、工作室などがあるが、その人員には損傷なかりし由である。

損傷部のキャンバスを取除けば、その下より、人が、二三人一緒に出入りできさうな大孔が現れた。

或ひは頭部を繃帯し、或は腕を、或ひは脚部を繃帯せる乗組士官や准士官を見る。兵員の方には、負傷せる者あまり見當らず。ひそかに無念の涙を呑む。

こつちの作業服の兵員が、夢中になつて働いてゐると、あつちの兵員たちは、その上に日蔽ひを作つたり、ラムネを持つていつたりして相援け合ふ美しき有様に、私はまた感激の涙を呑む。

作業員は、晝になつても、本艦に戻らず、その場で握り飯を頬張つて更に作業を続ける。薬罐を上から下げおろせば、それをとつて口から水を呑む。もちろん不平をいふ者など一人もをらず、ひたむきに作業を続ける。工作班の勇士とは、まことにかくの如きものかと、私はまた涙を呑む。

作業はどん／＼進捗する。見てゐてびつくりするほどの快調である。これでは、造船所も顔負けだ。

やがて日が暮れた。しかし作業員は手を休めない。

(八)

○月○日

今日も損傷駆逐艦○○の修理作業が続けられる。

機関長もF隊長もG隊長も、誰一人として士官室へ食事の下りて来ない。

機関長は戦隊機関長と共に、上甲板に立つて監督に餘念がない。G隊長は、向かふの艦の甲板の上に、着色眼鏡をかけて、しきりに指揮をしてゐる。F隊長の姿は見えないが、これは恐らく、本艦内の配置について一步も動かないのであらう。

今日も猛烈に暑く。

しかし損傷駆逐艦や本艦の作業員を傍近く見ては、暑いも何もいつてゐられない。私も大いに頑張らねば相済ぬ。部屋へ入つて、新しく報道原稿を書きはじめる。



午前も過ぎ午後に入る。

とき／＼筆を擱いて、甲板に出る。そのたんびに、修理作業はびつくりするくらゐ進捗してゐるのを見る。

それを見て、こつちもまた負けてはならぬと自室にかへり、向ふ鉢巻にて原稿紙の上に筆を走らせる。

午後四時、遂に凱歌あがる。

見事に損傷驅逐艦の修理を完了したのである。

驅逐艦は、本艦から離れて航行を始める。

すつかり元のやうに直つた。傾斜もなくなつた。よつほどよく見定めないと修理したあとが見分けがつかないほど、手際よく直つてしまつた。

この時間は修理の上から考へてまことに短く、そして工作班の作業繼續の上から考へると超人的だ。

本艦が動きだせば、途中で碇泊してゐた一驅逐艦から盛んに帽子を振られる。

『おゝ、あれはさつきまで本艦に横附になつてゐた驅逐艦〇〇だ。』

『あれがさうか。すつかり直つてしまつたので、おれは見違へたよ。』

こつちの水兵も總出で帽子を振る。

私も帽子をとつて、頭上にくる／＼と打振つた。

向かふはますます盛んになる。艦内からとび出して來て、檣の上へよちのぼつて帽子を振る者もある。

私の眼から、どつと涙が湧きだして、向かふの驅逐艦が見えなくなつてしまつた。

## 制 壓 巡 航

(一)

〇月〇日

ソロモン群島にて朝を迎へる。

こゝはこれで二度目である。二度目のせむか、島の原住民は一向姿を見せない。この前はかな



りびつくりしたが、今度は安心して切つて顔を出さないであらう。

前日と同じく警戒碇泊ではあるが、こゝは氣が安らかだ。

敵機もこのあたりまではちよつと目が届くまい。いさゝかのんびりする。

午前八時、スコール来る。

『總員スコール浴び方。』

當直將校が號令をかける。暑熱に苦しんでゐることとて、下士官以下手拭と石鹼を持つて裸で上甲板へとび出す。

黒雲は翼を擴げて見る／＼うちに全艦隊を押し包んでしまふ。

ぽつん／＼から始つて、ざあざあがう／＼と手荒き豪雨となる。

全艦は眞白き雨の中に閉ぢ籠められてしまふ。『スコール浴び方』の號令をかけた當直將校は、こゝでほつと溜息を吐く。

號令をかけても、スコールが遂に艦上を通らなかつた日には、たいへん申譯ないことになるのだ。

幸ひにしてすごい豪雨だ。上甲板はたちまち洪水の如くになり、天幕のふちから落ちてくる雨

水は飛瀑の如く、下で受けてゐる洗濯桶はすぐ一杯にあふれてしまふ。

あつちでもこつちでも嬉々として全身に石鹼をつけては洗ひ流す。序にいろ／＼の汚れ物を出して、洗濯までやつてのける。その頃には氣温はぐつと下り、傍で見てゐる私たちは寒冷を覺えてくしやみを一つ二つ。だからスコールに當つてゐる連中は、始めの爽快なる顔附はどこへやら、みんな唇を紫色にしてぶる／＼。

約三十分間、手荒き雨量を落として、スコールはさつさと引揚げてしまふ。するとあとは再びさん／＼として熱帯の太陽が頭の上から照りつける。温泉場へ來たかと疑ふほどの湯氣が、上甲板から天幕から砲塔から檣からもや／＼と立ち昇る。それもほんの一時のこととて、あとは前のとほり、いやにはつきりした熱帯の日和となつてしまふ。艦首に近く、白き洗濯物だけがぎら／＼と光り、そしていつまでも湯氣を立ててゐる。

『九時十時、音楽許す、酒保許す。』

なんたるえゝ日ぞや。スコールには當るわ、洗濯物は心おきなく出來てしまふわ、それに今音楽が許され酒保が開かれたのである。水兵たちは、鯛を釣上げた夷さまのやうな顔になつて、艦内とみに和らぐ。



こつちも負けぬ氣になつて、天幕の下に椅子をもちだして、ラムネのコップをあげる。そして士官たちと歡びを分かつ。

機關長、運用長など釣の名士は、早くも舷梯の下に絲を下ろして、毒魚善魚と交歡を始める。司令部も下に下りて來て、歡談の仲間がまた殖える。

午後に入ると、附近の島々よりカヌーが艦尾に集つてきた。いづれも物々交換を希望する原住民たちだ。

カヌーの中を覗くと、バナナあり、パイヤあり、椰子の實あり、それから眞珠貝あり、黒鯛のやうな魚あり、レモンあり。

水兵さんたち、甲板からバケツに紐をつけたやつを下ろして、わい／＼いひながら取引を始め。こつちの餌は煙草の『ほまれ』と『金鷄』とである。

言葉は一向通じないが、日本語と手眞似をくりかへしてをれば、そのうちに何とかうまくいく。鼈甲になる玳瑁の甲羅を持つて漕ぎよせて來た原住民がある。これが一等大きな賣物である。まだ磨いてはないが、中央板五枚、中央側板八枚、縁板二十五枚より成るすばらしいものだ。これには誰も手が出ないで、上から呻つてゐるばかり。

そのうちに、一名の心臟水兵が現れる。下を向いて、両手で龜が泳ぐ恰好をしてみせて指させば、カヌーの原住民にこ／＼して肯づき、『これか。』と玳瑁の甲羅を叩く。

『それだ、それ／＼。』

下から原住民が兩手を擴げて仰向く。『いくらで買ふか。』といふ表情だ。

『これだけで賣れ。』

と、例の水兵、『ほまれ』を三個差出す。原住民はつよく首を左右へ振つた。甲板の戰友たちは、げら／＼笑ひ出す。

『あほかい。玳瑁を「ほまれ」で買ふ奴があるかい。』

『おい、貴様の大事にしてゐる腕時計をやつてみる。そしたらすこしは話になるかもしれんぞ。』横で見えてゐる者の方が氣を揉む。

ところが御當人の水兵は更に動じないで、

『それぢやこれではどうだ。』

と、『ほまれ』をもう一個殖やして四個にする。

甲板の上では、またもどつと笑聲が沸く。下では原住民、強くかぶりを振る。



「いやに足許を見やがるなあ。それではこれぢやどうだ。」

例の水兵、掌に『ほまれ』をもう一個殖やして五個にする。

『よせ〜。話にならんよ。』

と、戦友更にさわぐ。

しかし例の水兵、泰然として更に『ほまれ』をもう一個積む。

『もういゝだらう。こんなにあるぞ。』

と原住民の方へつきだして見せる。原住民はまた首を振る。しかし思ひなしか、首の振り方が前よりも弱くなつた。

『慾ばりだなあ。よし、それぢやもう一個。』

と、例の水兵は、たうとう『ほまれ』を七個積上げて差出す。とたんに、カヌーの原住民、首を縦に振つて、玳瑁の甲羅を差上げる。

『えゝつ、本當かあ。』

戦友一同、鳩が豆鐵砲くらつたやうに呆れかへつて聲もなし。

『どうぢや。やつぱり「ほまれ」でも買へるぢやないか。』

玳瑁の甲羅一枚、その内地値段金何十圓だか何百圓だか、私は知らない。その代價『ほまれ』七個、この値段タイマイ二十一錢なり。これを書いてゐる私も、あほらしくなつて、今日の日記はもうこれ以上書く氣がせん。

(11)

○月○日

この前から艦長が上陸したがつてをられる島がある。本艦の陸戦隊が掃蕩上陸した島とは眞反對の小さい島であつた。今日はいよ〜それを果すこととなり、副長は留守をされるが、他の士官も殆どお伴をすることとなつた。私も随伴をすゝめられ、喜んで参ることとした。

この日の艦長のいでたちは、防暑服に防暑帽といふ輕装なれど、手には家重代の日本刀をひつさげられて、柔いやうで硬く、恩威いづれからでも來れといふ風に見えた。

舟艇一隻にカッターがついていく。

島に近づくと見るや、海岸に立つてこつちを見てゐた原住民はおどろいて部落の中に皆引込んでしまふ。



いよ／＼陸岸が近くなる。うつくしい海底が手に取るやうに見え出した。藻が手荒く繁つてゐる。魚が群をなして泳いでゐるのが見える。その中を舟艇は護岸につく。原住民がたゞひとりだけ、のこ／＼と出て来る。偵察に來たといふ恰好だが、これをさし招けば、素直に來る。そして舟艇をもやふ手傳などをし、假りに渡した板を抑へなどする。安心したといふ顔だ。その横をすりぬけると、ぶーんと激しい體臭。

上陸すれば、狭いこと日比谷公園の半分ぐらゐ。だが鮮かな光線にめぐまれたすが／＼しい島だ。

海岸にはマングロープの大樹が根を張り、その奥には椰子林が亭々と空を摩してゐる。その下に部落がある。檳榔樹の葉で葺いた家はどこか日本の農家のやうな感じであるが、床は高く、階段がついてゐる。各戸とも戸をびつたりと閉ざしてゐる。入口には教會から貰つたキリスト受難のカード繪がぶら下つてゐたり、十字架が吊つてあつたりする。

そのうちに、あつちの家からこつちの家からも原住民がちよろ／＼出て來て、次第にその數が殖える。いづれも手荒く黒い連中ばかりで、黒炭色で艶々した膚をもつた代表的パプア族である。



私は持つて來た煙草を大人に與へ、子供には着色繪葉書を與へた。皆よろこんでくれて、與へ甲斐がある。が、子供たちが、煙草を欲しがるのは面喰つた。與へると、五六歳に見える子供が、すぐ火をつけてすば／＼吸ひだしたり、下町のあんちゃんみたいに耳に挟んで得意顔になつたり、いよ／＼おどろく。それに、あたいにもお呉れといつて後から／＼押しよせてくる原住民の子供たちが、どれもこれも眞黒で、同じやうな顔をしてゐるものだから、同じ子供に何本もふんだくられてゐるやうな錯覺を起して困つた。

黒い御婦人はさすがに家の中で控へてど



ざるので、近づいてこれにも拜呈し、かた／＼家の中を見せて貰ふ。中は眞暗で、あやめも分たぬやうに見えたが、それは外の日光があまりに強いせゐであつた。赤ちやんを横抱きにして乳をのませてゐる黒き母親がゐたので、特によく検分したが、この赤ちやんは黒ちやんといつた方が相應しく、幼なけれど既に眞黒であつて、決して大きくなつてからあのとほり黒炭色に焦げるのではないといふ事實をたしかめた。しかしよく考へてみれば、それは當り前のことだ。

御婦人は、男子と同じく縮毛の毬栗頭だが、しづかにこれを見詰めてゐると、目鼻だちもおひとおひとよく分つて来る。やつぱり女人であるから、顔だちもやさしく、これは他人に聞かせたくない内輪話だが、私はちよつぱり望郷病を起し、何とかして話かけたくてうづ／＼したのであるが、この婦人たちにはピジョン・イングリッシュも全く通じなかつた。

この島には八人乗りの戦艦のカヌーが四五艘もあり、教會もあれば、椰子酒もあり豚も鶏も犬もをり、相當物持の島であつたが、せむしや脊髄病の者が多く、すこし氣味がわるくなつた。

先任參謀が、式部官らしい原住民に向つて、豚を交換せよと英語でいつたら、その黒き式部官は、豚は酋長のものであるから、自分ではどうにもならんと、ピジョンで應へた。先任參謀は、それなら酋長はどこにゐるか、連れて來れといふと、その式部官は沖を指して、わが酋長は今マンノ

ブワア(軍艦)へチェンヂ(交換)に行つてゐると返事をした。それからチェンヂといふ言葉が、私たちの間にひろまつた。

『パ。パイヤ、カム。このトバコとチェンヂ。』

『パ。パイヤ、フィンツシ。』

『フィンツシとは何ぢや。』

『ないといふことですよ。』

と私がピジョン通をふりまはす。

『あ、さうか。フィンツシはないか。折角來たのにみんなフィンツシぢやつまらんもの。』

島には、蠅と赤蟻とが夥しくゐて、これが頸筋や顔にべた／＼とりついたり、脛を匂ひ上つて來たり、うるさいことだ。

艦長は全島を一巡される。全島異状なしである。そこで全員引揚となつたが、艦長は協力した原住民たちに對し、洩れなく煙草『櫻』を數箱づつ與へられる。さすがは武將である。原住民はほく／＼ものだ。

舟艇は島を離れて歸艦の途につく。



艇に俄然蠅が猖獗をきはめてゐる。とんだ島土産だ。  
『總員蠅追ひ方。』

の號令がかかる。あつちでもびしく、こつちでもびしく。艇はスピードを出してゐるから、とび出した蠅は、あつといふ間に後に見えなくなる。

## (三)

○月○日

午前出港。水道に出で、○○群島との間を東に抜け、艦隊は處女航路を北上する。明日○○群島北端の○○に入港の豫定である。

大洋の航海はたのしい。

空と海と艦隊としか見えない世界を、何の雑念もなく、遙けき波浪を越えてひたむきに行くのである。こんな清淨な天地は外に求めても絶対にないやうな氣がする。

敵來たらば來たれ。いつでもわが無敵艦隊はお相手をするであらう。

だが敵は一向にわれらが前に現れない。

見敵必殺では、もう駄目である。求敵必滅と行くより外に途なし。

味方の哨戒隊は、空に海面に、必死になつて敵を求めてゐるのであるが、さつぱり敵影を認めないものの如し。

通信は夥しく入つて來るが、それはいづれも他戦線のものばかり。腕がぶん／＼と鳴るばかりだ。

今日はめづらしくうねりが大きい。

先行の驅逐艦列は、しきりに左右へ傾斜をくりかへしてゐる。ちよつと海域がちがへば、こんな具合にもう海の性質がちがってくる。これまでの航海のうち、最もアメリカ大陸の近くを航行してゐるので、敵の潜水艦でも出てくればいゝがと祈つてゐるが、敵影更になしである。

敵潜水艦は、武装の弱い汽船と見れば、待つてゐましたとばかり魚雷を放つ。われらのやうな大艦隊に出會ふと、鳴りをひそめて深海にもぐり込んでゐるらしい。

風が出て來た。

スコールとはちがふ。天候はすこし下り坂になつた模様である。だが熱帯の天候は、いくら悪くなつても大したことはない。



桁の繫索、しきりにひゆう／＼鳴る。艦もかなり揺れてきた。これで漸く飯がうまくなりさうだ。

士官室へ冷却水を呑みに下りると、

『やあ海野さん。移動發令ですね。』  
と聲をかけられる。

『えつ、移動發令？』

と、その方を振り向くと、水雷長が黒板を指してゐる。  
見ると、

第〇戦隊附報道班員。海野、南部、蘆田、田方は第〇根據地司令部附に任命されたと記されてゐる。

いづどこからこんな電報が舞込んだのだらうと、別にふしぎでもないことが、ちよつとふしぎに思はれる。

(いよ／＼第〇戦隊にもお別れか。親しくなつた本艦の勇士たちともお別れになるか。)  
と、急に淋しさがこみ上げてくる。

報道班員は、やつぱりつまらない。士官や水兵でないと駄目である。

いさゝか悲觀して、長椅子にぼんやり入り込んでゐると、そこへ副長が入つて來られた。

『いよ／＼退艦されますね。』

『は。副長、いつ退艦になりますか。』

『さあ、今のところ〇〇へ寄港する豫定がちよつとつかないのです。まあ、これから一週間か十日位先のことになりますね。』

『一週間か十日位先ですか。それはよかつた。』

私は、いさゝかほつと胸の安まるのを覺えた。

『永い間の本艦の生活に退屈せられたでせう。』

『いゝえ、どうしまして。もつといつまでも乗つてゐたいのですけれど。』

『さうですか。しかし、よく辛抱されましたね。』

さういはれると、私はちよつと返事に詰まる。

たしかに私はすこしく健康を害したやうであつた。實はこのところ盛んに咳が出て困つてゐたが、今朝起きて痰をはいたら、その中に糸のやうな赤い線が入つてゐた。血痰である。私はどき



んとした。しかしそれはほんの瞬間だけの愕きで、その後は平氣に戻つた。古い病竈が、すこしひどくも入つたのであらうが、こんなことで、而もこんなところでへたばつてなるものかと、猛烈に反撥心が起つたのである。

血痰は一度きりではなく、今も頑強に續いてゐる。しかし私はそれを誰にも告げなかつた。現に只今、副長にも話しはしなかつた。そんなことを話せば、きつと皆さんに心配をかけるだらう。そんなことでさわいで貰ふのが、たいへんいやであつた。私は遂にこのことを自分だけの胸に疊んで置くことにしたのだ。

血痰と聞けば、ひとは愕くだらうが、私にとっては、それはそれほど大したことではない。四年前左肺をやられて、血を吐いたことがあり、それに引續いて數年間、血痰に愕いたり惱んだりした。その間に、私は自分の身體を如何に扱ふべきかについて、自然に知識を得た。こゝ五六年は血痰との縁も切れてゐた。それが久方ぶりで今朝から始つたのである。私は白い紙にうけとつてそれを見たとき、ちよつと懐しくさへ思へた程だから、私は決して周章ててはゐなかつた。かういふときには、一三日なるべく靜かにしてをればいゝのである。恢復には自信があつた。ただ強ひて心配の種を拾ふなれば、このことが私の健康についての警報であり、そしてこれから自

分の健康がどん／＼下り坂になつていくのではないかといふ杞憂が起らぬでもない。

實際、艦内生活は陸上勤務に較べると、はるかに苦しい。赤道直下の艦内の熱さは、陸上に較べて數度乃至十數度高い。それに食事は悪いし、睡られはせず、戦闘中だからどうしても神経も疲れる。勇士たちの中にも、急性肺炎や肋膜炎の患者が出る位だから、私のやうな訓練されてゐない上に既往症のある身體は、もうそろ／＼がた／＼になつても文句をいへた義理ではないのではないか。

私は早くベッドに入つた。睡られはしなかつたが、カーテンを引いて、もう就寢したことにして置いた。明日はどういふことになるか。人事を盡して天命を待つとは正にこのこと、何事もあなたまかせの年の暮である。やきもきすることはない。

(四)

○月○日

目が覺めて、まづ氣になるのはあのことだ。えへんとやつて、調べてみる。まだ異状は完全にぬけ切らぬが、餘程うすくなつてゐる。昨夜はさすがに咳をすることを極力慎んだ。元來咳など



といふものは、自分の意志で停めようとして仲々止まるものではないが、しかしこいつはたいへんだと緊張すると、かなり敷を減らせられるものである。

食事だけは、休まないで攝つた。あとは部屋に引籠る。口もなるべくきかないやうにつとめる。午前八時、〇〇に投錨する。

ベッドから下りて、舷窓の外をちよつとのぞく。たしかに〇〇らしいが、前に敵前上陸した場所がどこに當るのやら、よく分らない。

晝食後、ちよつと甲板に出てみた。やつぱり位置が分らない。當直將校に聞いて、やうやく臈氣ながら見當がつく。こゝは敵前上陸したところより〇海里も距つた地點で、〇〇水道といふところださうだ。〇海里もちがへば、思ふところが見えないのも道理だ。

掃海が行はれた由。

明日から上陸が出来るさうだ。上陸許可と聞いては早く上陸したいが、あのことがあるので、當分指を唾へて引込んでゐるしかない。だが數日こゝに碇泊する豫定ださうだから、なにも急ぐことはない。

夕食のとき、大分珍しい土地の話題が並ぶ。身長三メートルばかりの鰐が泳いでゐたので、撃

つたといふ話、この向かふの棧橋の上に、ドイツ人の大きな家がある、その主人公も現にそこに住んでゐるが、細君と子供とは濠洲へ連れていかれたとのことである。生きてゐる玳瑁が、ぶかぶかと泳いできて、本艦から流す残飯をうまさうに喰べてかへつたといふ話。仲々魚が釣れるといふ話。西寄りの遠空に煙の上つてゐるのは製材工場であることを、艦載機が確認したといふ話など。

私はいゝ加減に腰をあげて、またベッドに登る。何だか嬉しさがこみ上げてきてしかたがない。あれは朝ちよつと出ただけで、それ以來ずつと見えない。急に原稿が書きたくなつた程であるが、こゝが自重のしどころと思つて、我慢をして寝てゐる。

(五)

〇月〇日

萬歳。あれはもうすつかり停つた。やつぱり私の思つたとほりだ。筋書のやうに搬んでこんなうれしいことはない。しかし警戒をゆるめてはならない。

後甲板で體重を測る。防暑服を着て十二貫八百匁なり。これで見ると、戦地に出て三箇月にし



て、約一貫目を喪つたことになる。

いよ／＼散歩上陸が許される。もちろん私は辭退する。

午後になつてからは上甲板に出てゐる。もうベッド引籠りにも飽きた。

三時ころ、附近に一艘のエンジンを持つたスクーターの航行するのを發見、直ちに信號を送つて呼びよせる。

白人が二人、一人は若く、一人は老人。外に原住民が三名ばかり乗つてゐる。そのうち若い白人だけが舷門をのぼつてくる。カーキ色の作業服は油だらけである。瘡せぎすの、背高く、目がひつこんで、顔の赭い男だ。剃刀をあてないと見え、赤い髭が生え放しであつた。

水雷參謀が舷門のところまで出て、海圖を出して問答を始める。他の參謀も、總出で傍に詰める。

英語を流暢に話すが、彼はドイツ人であつて、名前をヘルマンと稱し、この先の貿易交換所棧橋をあがつた丘の上に家を持つてゐるといふ。すると昨日噂に出たあの主人公にちがひない。

ヘルマンは、極めてはき／＼と應へる。

『非常に忙しいですよ。なにしろ〇〇守備軍の食糧をとゝのへる仕事を引受けてゐるのですから

なあ。さうです、この船で、方々の島々へいつて、主として野菜を集めてゐます。もし貴艦に於て必要だといふのなら、次の金曜日には野菜を持つてきてあげますよ。』

『どんな野菜があるのかね。』

『いろ／＼ありますよ。ポパイヤ(パイヤのこと)、胡瓜、ラドイツシユ、茄子、芋、レモンなど、いろ／＼あります。』

『ぢやあ君に頼むよ。なるべく澤山持つて来てくれたまへ。』

水雷參謀が主計參謀に早がはりだ。

『よろしい。次の金曜日を約束します。』

『野菜は相當代價をもつて買取る。』

『何といはれましたか。』

『つまり、われ／＼は野菜を只で貰ふわけではない。相當のお金を拂ふ。』

『いや、お金は要らんです。お金を貰つても、使ふところがない。』

『なるほど、それもさうだ。では、貴下の欲しい品物を云つて呉れば、それをあげよう。つまり物々交換といふことにしよう。』



『それは結構。では煙草を下さい。なほすこしの砂糖と肉の罐詰がいたゞけたら、たいへん幸いです。』

『この次までに用意をして置かう。君はこの邊の水路を知つてゐるかね。』

『測量器械がないから、正確なことは分らない。しかし余は十二年も前からこの土地にゐるから、或る程度知つてゐる。いつでも悦んでお話しませう。』

『君は十二年も前から、この土地にゐるのか。』

『然り。家も有る。逃げて來た土人を十人ばかり養つてゐる。妻と子供が二人ゐたのであるが、戦争が勃發するや、自分の留守にオーストラリアの兵がやつて來て、三人を拉致し、オーストラリアへ連れていつてしまつた。アイ、アム、ベリー、アングリー。アイ、ウイル、フアイト、ウイズ、ユウ。(實にけしからん話です。私は日本軍と共に闘ふんです)。』

私は右の文句のところ、歎息した。

『君のスクリーナーに電線が張つてあるが、あれはラジオかね。』

『いゝやラジオではありません。旗をあげるために張つてあるのです。』

『さうか。いや御苦勞だつた。ぢやあお歸りなさい。』

『ありがたう。今日はこんなに油まみれのきたない服を着て貴官の前に出て、まことに失禮をしました。どうか皆さん、私の家へ遊びに來て下さい。大いに歓迎します。庭も廣くて、クロツケも出来るし、相撲も出来る。ジャパニーズ・フェンシングもやれます。』

『ありがたう。おい君、この煙草をあげよう。』

と、水雷參謀長が『櫻』を興へる。ヘルマンは大悦びで、舷梯を下りて船にかへる。早速貰つた『櫻』を一本ぬきだして口に唾へる。そして盛んにこつちに向いて敬禮をしながら去つていく。よくみると、そのスクリーナーの上の檣の上には、小さい日の丸の旗が結びつけてあつた。

夜は、思ひ切つて入浴を試みる。暑くてやり切れぬからである。おかげで爽快になつたが、後でこれはすこし早まつたかなと後悔する。

(六)

○月○日

異状なし。いよく安心だ。大いに元氣となる。もう矢でも鐵砲でも持つてこいである。全くの話が、戦地で病氣になるほど心細いものはない。あれの間は、強ひて平氣を装つて頑張つてゐ



たが、癒つてしまつた後の今日になつて、あるときは心細かつたなあと思ふ。

今日はいよ／＼晴れて散歩上陸を試してみたいものだと思つてゐると、幸ひにも、司令官が幕僚を随へて附近の〇〇島方面を視察せられるといふ話を聞き、そのうちに加へていたゞく。

その島は、大した島ではなかつた。島の半分が、椰子のプランテーションになつてゐる。あと半分が、未墾の土地と、邸宅やコプラ工場や倉庫などになつてゐる。

相當大きい邸宅だが、家の中には家具の外何もない。大きな電気冷蔵庫が一つ目についたけれど、斧か何かでひどくぶちこはしてある。日本軍に使はれるのは癩だといふので壊していつたといふ痕は歴然だ。

かーんと鐘の音がする。何事であらうと、外に出てみると、廊下のところに、鐘が一つぶら下つてゐる。水兵たちが、面白がつて、かーんと叩いてゐた。食事を知らせるために使つた鐘らし。

散歩上陸の水兵たちは、いづれも大よろこびである。しかし何にも面白いものもないし、たいしてうまいものもないのであるが、それでもうれしくて仕様がないらしい。椰子の實がなつてゐるが、原住民がゐないので、登ぼつて取るわけにいかない。しかし何か土産の欲しい水兵たちは、

そこらに咲き亂れてゐる名もしれないふしぎな花を手に一ぱい摘んで悦んでゐる。どこからか、鋸を見つけてきて、倒れてゐる椰子の木を一生けんめい引き切つてゐる者もある。何に使ふつもりかと思つて聞けば、本艦へ歸つてから、これで細工をするのだといつて笑ふ。

貝殻を拾つてゐる水兵もゐる。芽の出た椰子の實を風呂敷に包んで持つてゐる者もある。蘭らしいものをハンカチにくるんでゐる者もある。コプラを鼻のところへ持つていつて、『あゝくせえ。』と放りだす水兵もゐる。カヌーを浮べて、あぶない手つきで、木の葉形の櫂をあやつつてふら／＼泳ぎまはる水兵もある。

私は、この邸宅の中で、日附の新しい手紙を拾つて、一つ／＼読んでみた。その中に一つ、私を興がらせたものは、今はこの島から濠洲へ逃げかへつたであらうところのプランテーションの主人公に對し、濠洲にゐるその細君から寄越した手紙であつた。

『わが愛する夫よ』といふ書き出しから始つて、濠洲の事情がことまかに書いてあつた。それによると、濠洲はひどい早魃に見舞はれ、畑といふ畑は山火事のととのやうによれ／＼になつてゐるさうだし、物價もだん／＼あがつてきてやり切れないさうだ。早くプランテーションに成功して、金を送つて來てほしいといふやうな意味のことも書き並べてある。敵國人の手紙を読むの



に味をしめたのは、第一回の敵前上陸を〇〇海岸にした以来のことだが、これを始めると、面白くてやめられない。とき／＼愉快なネタが落ちてゐるのである。

司令官は島を一巡せられて、すた／＼と舟艇に歸られたので、そこを引揚げる。歸途、その附近の暗礁について念入りな調査をする。さすがに司令部の幕僚ではあると感心する。

歸艦してみれば、今夜は新鮮なる牛肉が喰へるし、それに新鮮なる刺身がつくぞといふ耳寄りな話だ。

そのわけを聞けば、今日艦長について上陸した一隊は、例のドイツ人から牛のゐるところを教へられ、そこへいつたさうである。そこで命令により、護衛の水兵の一人が、銃を構へてどんと射撃したところ、一發の下に牛は斃れた。見てゐた原住民たちは、日本の水兵の水ぎは立つた射撃ぶりに大感動して、わあつとほめそやしたさうで、まるで壇の浦の那須餘一の再来といひたい光景だつた由。おかげでその原住民が斃れた牛を海ばたへ持つていつて、すつかり臓器を出し、そして全身をばら／＼に切つてくれたさうである。その牛肉が今夜の食膳に現れるだらうといふ話だ。

また刺身班については、戦隊機關長、機關長、運用長のゴムボート出撃に關する話があつた。

そのゴムボートが、魚のゐさうな珊瑚礁を探しまはつてゐるうちに、前方に海面から三つばかり小さな岩が出てゐるのを發見し、そらあそこに手頃の珊瑚礁があつたといふので、急ぎそれに漕ぎ寄せると、その岩礁が急にぶる／＼と揺るぎだした。はて怪しやなと思ふ間もあらばこそ、たちまちその岩礁は長さ十メートルあまりの大鰐となつて、あたり一面に手荒く海水を跳ね飛ばし、あつといふうちに海中深く潜つてしまつたさうな。とたんに、さすがのくろがねの大勇士たちも、魚釣りの興も一時に醒め、全速後進の號令をかけて、鰐に引つくりかへされまいと一生懸命ゴムボートをおさへながら歸艦されたさうである。

『あれがもし大鰐でなくて本當の珊瑚礁だつたら、今日の夕食にはもつと盛りのおいし刺身を皆さんに振舞ふことが出来たのになあ。』

と、どこまでも氣のつよい機關長の残念がることいつたら。

(七)

〇月〇日

俄かに本艦の食事が豪華版となつた。



朝から牛肉の佃煮が出てきたり、汁の中から鴨の肉が出て来たり、漬物にはかり／＼音のする胡瓜と香の高きパイヤが取合はせてついてゐたり、レモンが輪切になつて入つた紅茶が出て来たり、さぞ腹の蟲がびつくりすることであらう。これでは今日の晝食の豪華さが思ひやられる。しかるに私の右前に坐る老C隊長は、決して肉に箸をつけない。この間の豚以來、肉といふものに懲りてしまつたと述懐。

『それに昨日島で、原住民があゝの牛の腹を立ち割つて、血まみれの臟腑をぎゆう／＼とつかみ出したところは、いやぢやつたなあ。あゝ、何を喰べても、あの牛の臭ひがする。當分食事をするのをやめちやろかと思ふのぢやが。』

と、大閉口の態である。

『この際、かういふものをどし／＼喰べとかないと、第〇戦速を出すときに、それが出ないですよ。わしは悪いことは決してすゝめん。さあ、大いに喰べませう。おゝ、こいつはまた手荒くおすし／＼ぞー』

と、前のD隊長が例の手を使ひ始める。

『いや、何といはれたつて、私は喰べん。』

と、老C隊長は、どこまでも喰べない氣である。そして申受け品の海苔と花らつきようと割り鯉節ばかりで飯をかき込むのであつた。すこし氣の毒になる。

その午後、私は航海長に誘はれて、鰐退治にお伴することとなつた。

『どういふ方法で鰐を退治するのですか。』

『ピストルで撃ちます。この私がねえ。』

と、航海長は肩から下げたピストルのサツクの上を抑へる。

『すこし怪しいですな。』

『すこし怪しいとは失禮ですね。まあわが手並のほどを見てゐて下さい。もつとも鰐が現れてくれなきや、どうにもならんが……』

『鰐のゐるところは分つてゐるのですか。』

『機關長が行かれるから、案内の方は大丈夫ですよ。』

といつてゐるところへ、うしろから機關長の聲で、

『さあいよ／＼昨日の敵打ちに出發だ。さあ乗つてくださる。』

『船は、何で行くのですか。』



と、私は訊いた。すこしよくない豫感がするので。

『ゴムボートです。今舷梯の下に廻つて來ました。』

やれ／＼ゴムボートか。ゴムボートはあまり感じのいゝものではない。なんだか玩具みたいな氣がする。だが事こゝに至つて、私はとりやめますともいひかねる。

舷梯を下りて、水兵の漕手が操つてゐるゴムボートに足を踏み入れる。ぐにやりと凹んで、ぐら／＼と揺らぐ。早速助け舟と叫びたくなる。これであと二人も乗つて、身の丈十メートルの大鰐退治をやらかす度胸は、なるほど帝國海軍魂だわいと、泣きたくなるほどの感動を催す。

あとの二人も乗り込んだ。機關長は舳に、航海長は役目柄櫓のコツクスの席に。

『出港。』

航海長が號令をかける。よろづ本格的である。水兵はオイルを引き、正しいピッチで漕ぎ始める。

私は航海長に背を見せて腰を掛けてゐる。漕手の〇〇一水とは差し向ひだ。

『機關長、どつちへいきますか。』

航海長が訊く。

『左舷斜め前方に、川口が見える。あれへ直航しませう。』

『取舵三十度。——宜候。ゆつくり漕げ。』

大したものだ。號令だけは、〇萬トンの鋼鐵艦並みだ。かうやつて取澄してゐると、私は報道班員ではなくて、水雷長ぐらゐになつた氣がする。

力漕また力漕。相當漕いだと思ふのに、ふりかへつて見れば本艦は手の届きさうな近くに見える。

かうして千メートルばかり漕ぐと、やうやく川口近くに來た。海底は急に淺くなり、ボートから青いかんてんのやうな綺麗な海水を透して下をのぞいてみると、白珊瑚は森林のやうに繁り、菊目石のやうなこれもやつぱり珊瑚であるが、それが海底に岩窟のやうな恰好で蟠つてゐる。その上に、痛さうなとげ／＼に蔽はれた眞黒な海藻がいくつもへばりついてゐる。いやらしいほど赤い海盤車が、ダンスをしてゐるやうに五本の足をちら／＼動かして匍つていく。どぎつい赤だの青だの黄だのの色彩をもつた部良に似た魚が、たくさん泳ぎまはつてゐる。龍宮とはこんなところをいふのにちがひないと思つた。

川口に入る。急に水がどす黒く變る。どうしてそんな汚いのかと思ひながら、瞳を定めてよく



見ると、何のこと水が汚いのではなくて、そこには背の黒つぽい幼魚のすばらしい大群で川口が埋つてゐるからであつた。空にある星數も多いが、しかしそれもこの幼魚の絶大なる數に比べれば桁ちがひであらう。

その幼魚が、とき／＼ざざざ／＼つともすごい音をたて、手荒く波を起して、蛇のやうにとび上るのだつた。それは沖から、大きな魚の群が、この幼魚を喰べようとして、來襲するためであつた。

その危険をさけて、幼魚がざざざ／＼と宙にとびあがれば、それを待つてゐましたとばかりに、附近のマングロブに停つて待機してゐた白い鷺と黒い鷺とが數十羽、ばた／＼と一度に羽搏きをして飛び上り、たちまちさつと低空飛行やら垂直降下でその幼魚を嘴にとらへる。その技は仲々鮮かで、黒い鷺よりも白い鷺の方が一段と妙技を演ずる。幼魚ばかりはいゝ面の皮で、水中にをれば巨魚にばかりとやられ、空中に跳ねあがれば鳥の嘴にかゝり、まるで逃げてばかりゐる印度洋方面のイギリスの戦艦みたいである。

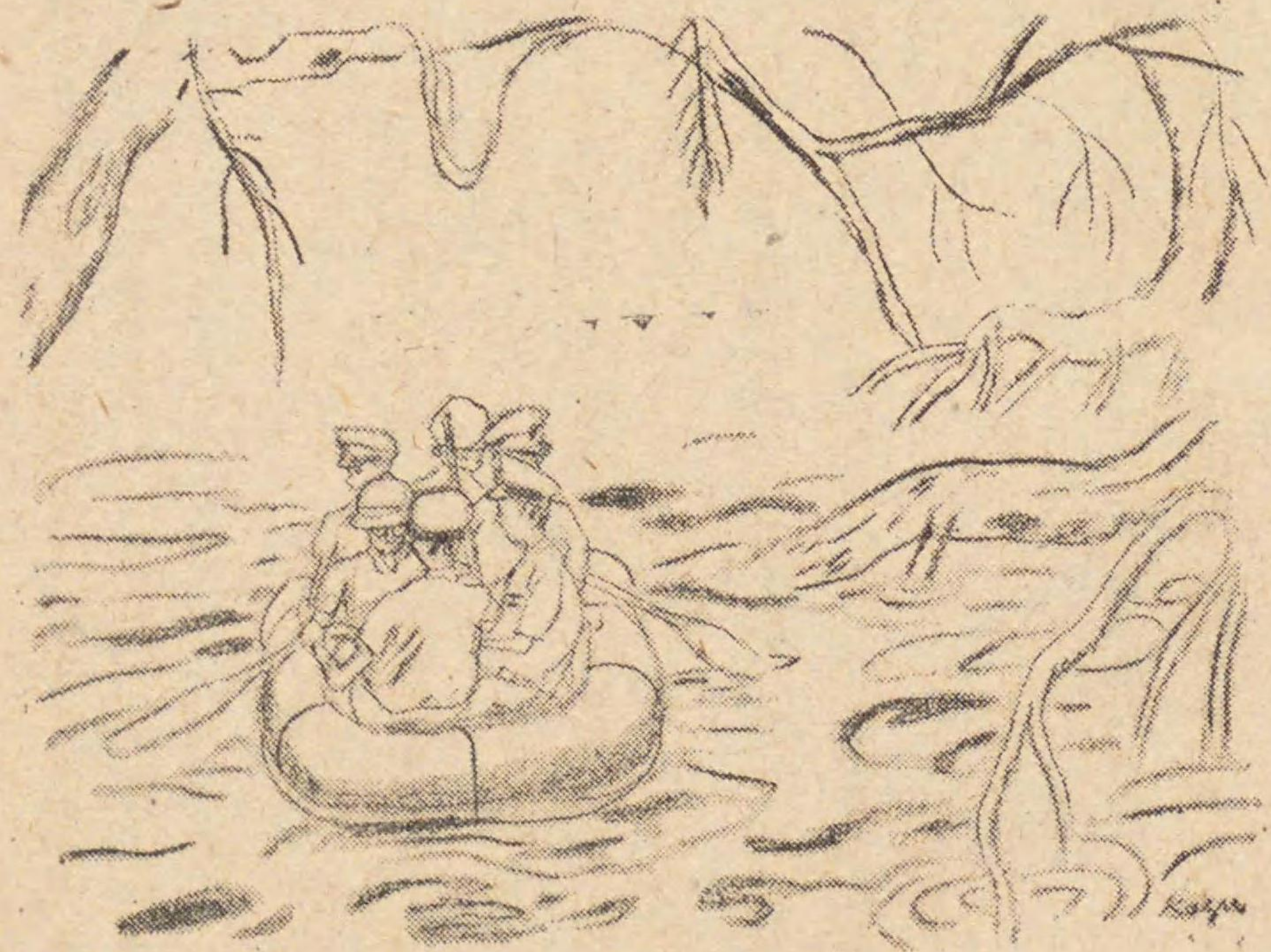
川口を過ぎて、ゴムボートはいよ／＼流れをしづかに遡航する。

兩岸はせまり、マングロブは枝をのぼし、水面すれ／＼にゴムに似た光澤のある硬い葉が繁

つてゐる。柿の花に似た白い花をつけてゐる。その間に椰子の木、タコの木、杉によく似た真直に伸びた木が、ジャングルの名に背かず、みつしりと密生してゐて、森の中には陽の光も届かず、ひやりとする常闇の世界である。

とき／＼静寂を破つて、名もしれぬ怪鳥が、ぎやつ／＼、こう／＼、びい／＼と啼きさわぐ。杉のやうな大木の幹を、大とかげがする／＼と梢の方へ匍ひのぼるのを見かける。長さが一メートルの餘もあるでかいやつだ。

流れを遡るに随つて、いよ／＼兩岸はせまり、朽木が川中に横はつて、われ／＼の





前進を阻む。手の届きさうなマングローブの根の上に、かはせみが停まつてゐて、大きな嘴をふりながら私たち一行の姿を怪訝な面持で見送る。

『うわーっ、かゆい。』

うしろの航海長が叫んだ。

ふりかへつてみると、航海長の手の甲が、眞赤な血だ。蚊をつぶしたらしい。ピストルを持ちかへて、びしゃ／＼叩く。そのたびに銃口が私の背中に向く。まさか間違ひはないだらうが、こつちは気が氣でない。そのうちに私の脛が猛烈にかゆくつた。見ると小さい眞黒な蚊が、胡麻をふりかけたやうに向脛にとまつてゐる。びしゃ／＼と引叩く。

私の目が漕手の〇〇一水の胸に移る。たいへんである。黒胡麻のやうな蚊が、べた一面に停つてゐる。〇〇一水は別にかゆい顔もしてゐない。両手がふさがつてゐるので、蚊を拂ふことも、かゆがることも諦めてゐるのだらう。

『蚊を叩きますよ。』

と、一應断つてから、私は漕手の胸をびしゃ／＼と叩いた。蚊は眞赤な血の斑点と化して潰れる。脛にもうんと停つてゐる。どん／＼潰すが、敵は執念ぶかく襲撃して来る。それ以來、私は

〇〇一水の蚊つぶし役を専門にする。

『こりやいかん。もう下らう。』

機関長もあきらめる。

『川口まで下りて、あそこで魚をすこし掬はう。』

私も賛成だ。かうした湿地帯に棲んでゐる蚊は、往々にしてひどい熱帯マラリアの病菌をもつてゐると聞く。鱈の巢が見つからんで残念だが、マラリアの蚊の餌食になりどほしではやり切れな。

再び川口に出る。こゝはもう蚊がゐないから大丈夫である。向ふに青き海が光る。眞晝の世界へ再び戻つてきた。遠くで飛行機の音がする。わが艦載機の音だ。

『鱈はをらんですなあ。』

と航海長が、残念さうな聲。

『昨日はそのへんにをつたんですがねえ。そしてこつちへ逃げこんだが、どこへいつたんだらう。昨日のお髭さんが又やつて来たといふので、鱈公大いに恐れをなして出てこんのぢやらう。』と、機関長は舳にあつて自慢の髭を引張る。



鰐退治の代りに、機関長は網をもつて魚を掬ふが、一尾も中に入らぬ。こんどは銛もりで突刺さうといふのでやつてみたが、このあたりの魚は仲々いきがよくて、たくみに身體をかはして逃げてしまふ。

『魚も鰐も日暮にならないと手にかゝらん。』

機関長、やうやく諦め、ボートを岸へよせて、代りにやどかりを拾つて、バケツの中へがらからと入れる。

『あ、スコールの雲だ。こつちへやつてくるぞ。』

航海長が目ざとくそれを見つける。それでは歸らうといふことになつて、ゴムボートは川口を離れて、本艦の方に漕ぎ戻る。私はすこし頭が痛む。強い日射に曝さらされたせゐか。

## (八)

七月〇日

昨夜相當つよいスコールが通り過ぎたが、その割に涼しさが残つてゐない。

白はかん／＼照つて、甲板は手荒く焼けつく。風は全くなし。部屋で散髪をやつてもらふ。す

こしは涼しくなるかと思つてである。だが、やつぱり大したことはない。

晝前、一艘の帆走汽艇はんそうきせうの行くを見附ける。直ちに、こなたへ呼びよせる。

舷梯の下に着いたその艇を見れば、原住民ばかりが乗つてゐる。この前來たヘルマンの船によく似てゐるが別のものだ。ビジョンを話す原住民の一人をあげて訊問する。話がよく通じないが、ヘルマン一派の船にはちがひない。そのうち、やうやくはつきり分つたことは、この艇は、〇〇島に收容してある癩病らいびやうの原住民へ、食糧を持つていつてやつたり、患者を輸送したりするために動いてゐる船だと分る。

『ふーん、レプラ船か。』

と水雷参謀が、鼻に皺しわをよせる。並んでゐる士官たちも、うしろへ身を引く。

なるほど、さういへば橋に小さい日章旗と共に、黄色い旗をあげてゐるわい。興をさました私は、自室へ引取る。机の前に腰を下ろして、ふと舷窓の向ふを見ると、崩れた顔の原住民が、こつちを覗のぞいてゐる。舷梯の下は、すなはちわが部屋の舷窓である。だからレプラ船から、こつちが覗けるわけである。これはたまらんと、いそいで舷窓を閉める。レプラ菌が室内しやうないに充滿してゐるやうで、氣持がわる／＼なつた。居所がなくなつて、また上甲板に上る。



そのときレブラ船は、やうやく本艦から離れたところだつた。水兵が五六名、例の豚殺しの石炭酸噴霧器をかついで、舷門から舷梯へかけて大消毒を始めた。水雷参謀までも念入りに石炭酸をふきつけられ、こいつはやり切れんと鼻をつまんでゐる。

午後になつて、運用長から帆走に参加をすゝめられる。悦んでお伴をする。

これは本艦のカッターに帆を張つてヨットにするわけ、相当たくさん乗れる。

舷梯を下りてみると、既に中には、ガンルームの猛者連中が大勢乗つてゐる。兵學校をついての間卒業した若い少尉や候補生たちである。それに、ガンルームの大將の通信長が加はつて、隊形が整ふ。あとから乗り込んで来たのは、當の運用長の外に飛行長、それから戦隊機關長も御隠居さま然と乗り込まれる。

本艦の蔭を離れると、どうやらすこし風が當り始める。艇長がガンルーム連の中から選任される。いよく帆をあげて走る。

離れるに従つて、風はつよく當る。白い帆は風を一杯に孕み、滑るやうに進む。その代り舷から釣糸を垂れてゐた連中は、糸が浮いてしまつて悲鳴をあげる。

キヤップテン・オヴ・ガンルームの通信長が軍歌を高らかにうたひだす。それに和して候補生

が聲を張りあげる。艶のある聲もあるし、どら聲もある。

『うーん、いゝなあ。去年の秋、内地を出たときや、まさかこんな南緯〇度といふやうな敵の領海で帆走をやるなんて夢想もしとらんかつたなあ。』

通信長が述懐する。

『これなら、和船も積んでくるとよかつたですなあ。』

『うん、あれはいゝ。櫓をぎいつくと漕いで見たくなつたなあ。』

『歌ひませう。』

『よおし、軍歌始め。』

また軍歌が始る。こんどは通信長も飛行長も一緒に聲を合はせる。戦隊機關長まで、聲をはりあげる。そのあとで、

『この軍歌は、おれが兵學校の三號のときに出来た歌だから、ずるぶん古い歌だが、この頃は節がすこし變つたね。』

『さあ。わたしたちは、かういふ節で習ひました。』

『さうかね。おれのとときは、こんな風に歌つた。』



と、はからずも戦隊機關長〇〇大佐の獨唱が始る。お年齢に似合はぬ可憐な聲なので、隅つこで笑ひをころしてゐる候補生もゐる。青く澄んだ高い空、さびなみ立つ海原、涼しい潮風——只今戦闘中なることをしばし忘却する。

とき／＼風が落ちて、帆がだらりと下る。帆を張りかへて、また走る。走航一時間あまりにして、とある無人島に着いた。國民學校の運動場ぐらゐの狭い島だ。しかしこゝにも椰子の木やマングローブにタコの木が互ひに押し合ひながら繁茂してゐる。しばらく碇泊ときまる。

運用長を始め、釣り名人に非名人の組は、礁を見つけると裸になつて、胸のあたりまで海水につかつたまゝ釣糸をたれる。身體のまはりに、色も綾なる美魚珍魚怪魚がわんさと寄つて来て、どう／＼めぐりをする。足をあげると、魚どもの腹を蹴りさうである。だから面白いほどよく釣れる。

あとの連中は、禪一つになつて、さかんに泳ぎまはる。附近には鱈が多いし、それから現に大鰐も出没してゐるといふのに、若いガンルームの猛者連はそんなことはおかまひなしで、ずんずん沖へ泳ぎ出る。但しそのうちの一人は、必ず舟の上に立つて、嚴重見張についてゐる周到さで

ある。眞珠灣のヤンキー部隊とは大分ちがふ。

私は例のこともあるので、泳ぐことは遠慮して、只ひとり汀を歩きまはつて、浪に打上げられてゐる白い珊瑚や珍しい貝殻を拾ひ集めて、砂上に龍宮城を構築する。戦場に來ると、ふしぎとみんな童心に還るものである。

一時間ほど遊んで、島を離れる。歸途はうまく風が吹いてくれ、舟は傾いて矢のやうに走る。あまり早く走るので、泳いだ後を裸になつてゐた候補生の連中、あわてて服を着たときは既に遅し、本艦の甲板から當直將校の目がこつちへ光つてゐた。

士官室へ下りて、サイダーを一本、息もつかずにあふる。そのおいしいことといつたら、夕刻、艦載機還る。艦載機は私たちがやがて下ろされる筈の〇〇根據地まで連絡に行つてゐたのであつた。

その土産話に聞けば、このごろ〇〇は毎日のやうに敵機が來襲する由。今日も午前中に『空の要塞』が三機編隊で、高度九千メートルをとつて來襲し、爆弾十數個を〇〇灣の艦船めがけて投下して去つたさうである。もちろん味方に被害なく、敵の全弾は海水に命中したさうで、毎度のことながら原住民が悦んだことであらう。さういふときは、海水の中に暮してゐる魚どもはとん



だ傍杖を喰らひ、激烈なる水壓にやられてぶかく海面に浮き上る。原住民は待つてゐましたとばかりカメラを漕ぎ出して、その魚を拾ふ。かくして勞せずして大漁になるといふわけである。今日は日記につけることが、ずいぶん多かつた。就寝の前に、必ずその日の分はつけて置くことにしてゐる。今夜もそれを綴りながら、ふと氣がついて日記の頁を過去の方へめくつてみた。

○月○日、甲板でラツパが鳴つたが、なんのことやらさつぱり分らん——とか、○月○日、『配置につけ』の號令が出たさうで、自室にとつてかへし、仕度をして外へ出てみると、どの通路もばつたり鐵扉が降りて、私は罐詰になつてしまつたことを發見した。さあたいへん、どうしたらよからうか——とか、○月○日、艦内の水兵さんに敬禮されるのは悪い氣持でないが、こつちの答禮がすぐ間に合はないものだから、艦内を歩くと志が疲れてかなはぬ——だのと、可憐なることが手荒く書きつけてある。それを讀み返して、苦笑また苦笑。爆笑また爆笑。

慣れることは早い。今では私もどうやら艦内生活に慣れ、一人前の乗組員になつたやうだ。昨日今日の日記を繰返してみて、特にさういふ氣がした。實に感慨無量である。

## 退艦の日

○月○日

たうとう退艦の日がやつてきた。

ついでこの間本艦に乗込んだと思つたが、指折り數へてみると、既に四十五日経つてゐる。始めは嚴格なる規律の生活に、肩がこつて仕方がなかつたのが、このごろではすっかり軍艦生活に慣れてしまつて、すこしの苦痛も不便もない。この上は、いつまでも乗つてゐたいと思ふ心が一方にあつたが、艦隊司令部から配屬變更の命令が出たので、やつぱり退艦するしかない。乗組の士官から兵に至るまですっかりお馴染みになり、そしてたいへんお世話になつたのに、こゝで私ひとり退艦することは、まことにさびしいことであつた。

士官室では、私のために、また豪華な送別の會を開いてくれた。豪華といふのは、顔觸れのことであつて、卓上にのるものといへば、手荒く防腐劑の入つた酒がまづ充分にあるだけで、あとは罐詰が出てくるだけ。しかし従兵長以下が、どこからか胡瓜を都合したりマヨネーズを探して



きたりして、その夜の従兵の格別念入りのお給仕と共に、そのまごころが腸にしみわたる宴會であつた。

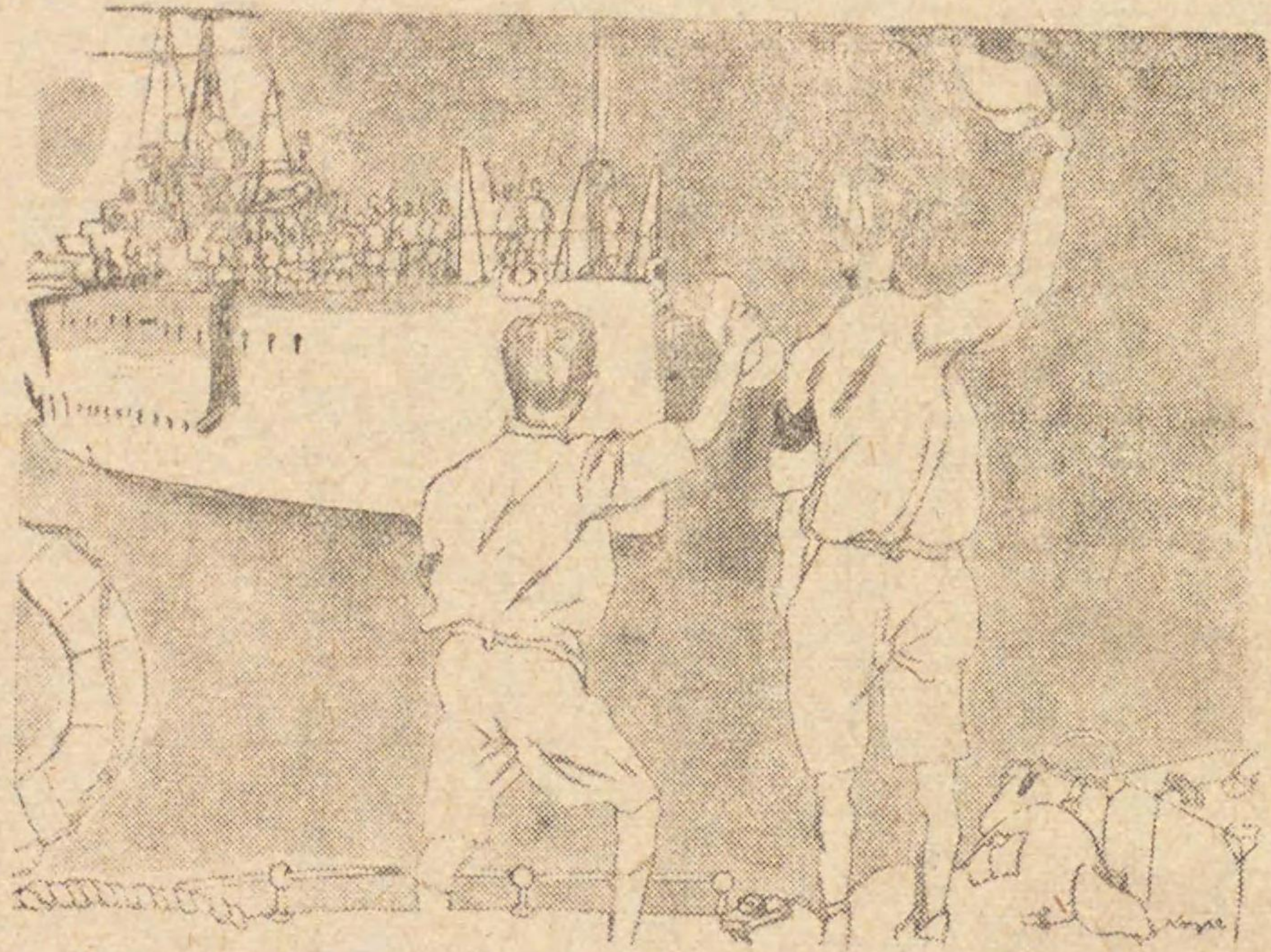
僚艦〇〇から、南部記者がすっかり身仕度をして、やつてきた。私たちは、最後に副長のところへいつて、玉露を御馳走になつた。そのうちに従兵が、退艦の時刻となつたことをしらせて来た。

荷物は既に上甲板に出てゐた。舷門のところには、艦長以下の士官や、下士官兵が私ごととき者のために、もの／＼しく整列してゐてくれた。私の胸はたゞ火と熱した。そして士官らしくはきはきした態度で一同に訣別の挨拶をして廻つた。

南部君に促され、リュックサックを持つて舟艇に移つた。

艦上には、総員總出で、こつちへ帽子を丸く輪に振つてくれてゐる。艦長の姿も見える。やさしい母親だつた副長の顔もある。永い間同じ熱室に臥した老C隊長も帽子を振つてゐてくれる。参謀の姿も交つてゐる。

従兵一同がいかたまりになつて帽子をくる／＼廻してゐる。  
『ありがたう。ありがたう。御武運を祈ります。』



舟艇は浪を蹴立てて棧橋へ進む。

艦から帽子を振つてくれる人々の顔はもう誰が誰だか分からなくなつた。たゞ後楯高く、あの下にこそ死なぬと誓つた軍艦旗が、翩翩としてひるがへつてゐるのが、いつまでも尊く懐しく仰がれた。

私はまた艇上からお辭儀をした。

『海野先生が、こつちへ向いてお辭儀をしました。』

と、舷門では見張員が叫んだことであらう。

棧橋に艇はついた。

そこには、一足先に着いた、お仲間の田方カメラマンと蘆田寫眞班員とが待つて



みた。

『おー』

『おー』早く上つてさ。

棧橋へ上つて、久方ぶりに四人の報道班員はしつかり手を握りあつた。

『あゝ、第〇戦隊の生活は、ずいぶん苦しかつたけれど、愉快だつたな。』

『うん。別れてくると、ちよつと淋しいね。』

『うん、ささゝかつらさ。』

一同は、荷物に腰をおろして、沖の戦隊を名残り惜しさうに眺めながら、鳥渡黙つた。やがて田方君が立ち上つた。

『さあ、荷物をついで新任地の司令部へ急がうぜ。』

『よし、行かう。こんどはこの作戦に連れていかれるのかね。』

『さあ、どこだね。とにかく今夜から又へぼ將棋戦が始まるよ。』

『そしてまた頭の上には、敵の爆弾と機銃弾とが賑やかに降つてくるだらう。』

『あつ失敗つた。おれは軍艦の中へ鐵兜を忘れてきた！』

赤道南下 (終)

誰が鐵兜を軍艦の中に忘れてきたか、それはこゝに記さないのがいゝだらう。占領地〇〇の棧橋に、四名の報道班員は、再びそこにえんこをして、沖の軍艦を眺めた。



(出文協承認)  
あ310014號

下南道赤



製複許不

昭和十七年十二月十五日初版印刷  
昭和十七年十二月二十二日初版發行

(二〇、〇〇〇部)

◎定價一圓八十錢

送料 内地(小包)十五錢  
其他(四種)二十錢

著者

海野十三三

發行者

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地  
高木義賢

印刷者

(東京) 奈良直一  
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所

株式會社 常磐印刷所

發行所

株式會社

大日本雄辯會講談社

振替口座・電話 五三〇〇  
東京三九三〇 牛込(34)代表 六一〇〇〇  
六二〇〇五(長)

日本出版文化協會會員番號一一六五一五番

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地



大本營陸軍報道部提供

大東亞戰爭陸軍報道班員手記

文奉公會編

第一輯 マレー電撃戦 一五〇

第二輯 コレヒドール攻略戦 一五〇

第三輯 ビルマ戡定戦 一五〇

第四輯 ジャワ撃滅戦 一五〇

航空 文大東亞 海鷲戦記 一六〇

海野十三著 赤道南下 一八〇

棟田 博著 軍神加藤少將 二〇〇

山岡莊八著 軍神杉本中佐 二二〇

文部省並に日本出版文化協會推薦

木村 毅著 大山元帥 一八〇

日本出版文化協會

中村吉藏著 伊藤博文 二〇〇

日本出版文化協會推薦

松澤卓郎著 野中兼山 一五〇

◇鷺尾雨工著 大楠公 一八〇

文部省推薦

◇菊池 寛著 勤皇菊池一族 一六〇

文部省推薦

◇高神覺昇著 父母恩重經講話 一〇〇

◇中川日史著 死に生く 一八〇

◇正木不如丘著 高原療養所 一八〇

◇谷脇素文編 畫川柳漫畫傑作集 一五〇

◇櫻田常久著 安南黎明記 一七〇

◇寒川光太郎著 サガレン風土記 一五〇

◇石井哲夫著 印度鐵騎隊 一五〇

◇諏訪三郎著 家の手 一八〇

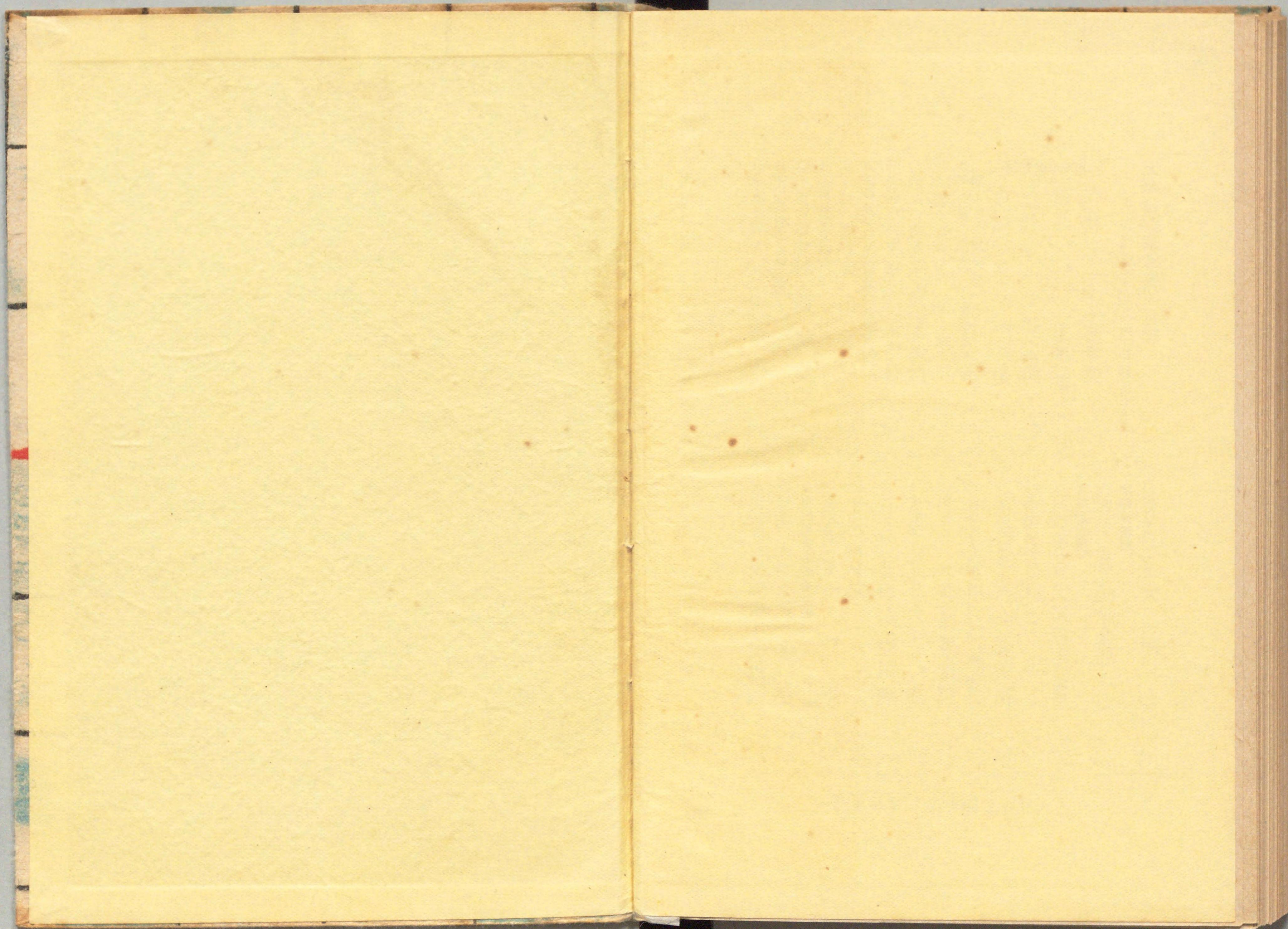
◇舟橋聖一著 女の手 一六〇

日本出版文化協會推薦

◇笹本 寅著 小説 葉隱 一五〇

◇田岡典夫著 武邊土佐物語 一六〇







錢十八圓一價定 ㊦ 行發社談講會辯雄本日大

行印社會式株利印外中